
仮面ライダーサソード

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーサソード

【Nコード】

N4433M

【作者名】

天使

【あらすじ】

生徒会の一存の杉崎鍵は、義理の妹の林檎と幼なじみの飛鳥で二股関係に成り学校のクラスメートからいじめられます。そんないじめられているのを救ったのが『神に代わって剣を振るう男』でした。勝手に妄想で書く物ですので中傷的で悪質な感想は、お控えください。

OPは、ライジングエアで歌うのは椎名深夏です。

プロローグ：悲しき継承（前書き）

生徒会の一存の杉崎鍵と原作の仮面ライダーカブトのサソードの所持者：神代剣の過去を載せました。

プロローグ：悲しき継承

何処かの廃墟の工場で二人の男がお互いを見て白いタキシードを着た男が口を開いた。

「スギードーレ！俺を倒せ！」

神代剣は、言う。

「何で・・・何で剣センパイを倒さなければいけないんですか！？」

もう一人の男は、神代剣よりも若く右手に紫の剣を持っていた。

「全てのワームは、俺の敵だ！最強のワームでもあるこの俺を倒すんだ！頼む鍵！」

神代剣は、何時も杉崎鍵の事を『スギードーレ』と呼んでいたが初めて本当の名で呼んだ。

数ヶ月前に遡る。

杉崎がまだ中学3年の時に幼なじみと仲良く成り過ぎて義理の妹が心の病気に成ってしまい幼なじみ供ギクシャクした関係に変わり学校生活でも上手くいっていなかった。

クラスメートの奴等は、そんな杉崎が気に入らなくて学校の裏に連れ出した。

「おい！何時までいじけているんだよ！」

ボッコ！

クラスメートの一人が杉崎の横腹を拳で殴る。

「気に入らねえんだよ！」

ガシッ！

クラスメートのもう一人が殴られて倒れた杉崎の髪を鷲掴みした。

「オレを罰してくれ……」

杉崎は、無表情のままクラスメート達に頼む。

「んだと！」

ボッコ！ボッコ！ドン！ドン！

杉崎は、抵抗もしないでクラスメート達の攻撃を受け続けた。

「やめろ！」

パシーン！

ボコボコにされている杉崎は、別の声がしたと思ったら大きな竹刀で叩く音がして振り向くと白い学ランを着た中学生には見えない音がクラスメート達を倒していた。

「な・何だよアンタは！？」

クラスメートの一人が傷だらけのまま男を見る。

「俺は、神代剣！全てにおいて頂点に立つ男で卑怯者が嫌いな事にも頂点に立つ男だ！」

神代剣は、クラスメート達に憎しみが混じった表情で睨む。

「くっ！クソーツ！」

クラスメート達は、神代剣と倒れている杉崎の前から逃げて行った。

「大丈夫か？」

神代剣は、ボロボロに成って倒れている杉崎に手を差し伸べた。

「は・・はい！」

杉崎は、最初驚いていたが直ぐに我に帰り剣が手を差し伸べた事に気付く。

「お前の名前は？」

「杉崎鍵です。」

「スギードーレだな。よっし！スギードーレ、今日からお前は、俺の後輩だ。俺は、後輩を鍛え直す事にも頂点に立つ男だ！」

（いや・・・オレ・・・スギードーレじゃなく杉崎ですけど・・・）

杉崎は、心の中で剣に突っ込んだ。

それから剣は、杉崎に剣術を叩き込んだ。

杉崎は、剣と出会った事でツツコミもカナリ上達した。

そんなある日杉崎は、自宅に居ると玄関からインターフォンが鳴った事に気付いて行った。

玄関を開けると剣の執事のジイヤさんがいた。

「ジイヤさん？どうして此处に？」

「杉崎様。坊ちゃまがコレを渡して欲しいと言っておいりました。」

ジイヤは、杉崎に紫の剣を渡した。

「これって？」

「それは、サソードヤイバーと言う物にございます。」

ジイヤは、車のドアを開けた。

「付いて来てください。坊ちゃまが待つております。」

杉崎は、車の中に入ると廃墟の工場に向かった。

「私は、此处で。」

ジイヤは、杉崎を廃墟の工場に下ろすと何処かに去る。

杉崎は、工場の奥に行くと顔色を悪くした剣がいた。

「剣センパイ？」

杉崎は、何時もと様子がおかしい剣に気付いた。

「うぐ……ウワアアッ！」

剣は、叫ぶと銀色の蠍の怪人に成った。

「ッ！？ワーム！？」

杉崎は、聞いた事があった。

ワームと言う怪人は、殺した人間に擬態してその人間の記憶を受け継ぐ習性を。

『ガアアアッ！』

蠍のワーム：スコープオンワームは、杉崎に突進して数メートルと後ろに飛ばされた。

（う……嘘だ！剣センパイがワームだなんて……嘘だッ！！）

杉崎は、絶望的に成りながらも立ち上がった。

スコピオンワームは、擬態している剣に成った。

「スギードーレ！俺を倒せ！」

「何で……何で剣センパイを倒さなければいけないんですか！？」

「全てのワームは、俺の敵だ！最強のワームであるこの俺を倒すんだ！頼む鍵！」

杉崎は、思い出した。

剣には、一人の姉が居たが蠍のワームに殺された事を聞いていた。

（剣センパイの最も憎いワームを倒す事が剣センパイの願い……）

杉崎は、尊敬している剣の最後の願いと悟った。

スッ

杉崎は、サソードヤイバーを構えた。

『standby!』

地面から紫の蠍のロボット：サソードゼクターが出て来た。

ガシッ！

杉崎は、左手でサソードゼクターを掴んだ。

「変身！」

ガチャッ！

『Henshin!』

杉崎がサソードゼクターをサソードヤイバーに装着させると電子音が響く。

杉崎のサソードヤイバーを持っている右手が紫色の鎧に変わり段々杉崎の体を包み込んだ。

「ッ!？」

杉崎は、驚いた。

身体が紫色の鎧を形成し両肩、両腕、背中、頭部左右、右胸辺りに繋がれたオレンジ色のチューブが付けられ右胸辺りにチューブと同じオレンジ色のコアと蠍の尻尾を象りスコープが付いたヘルメットを装着し仮面ライダーサソードマスクドフォーム（今後サソードMと略す）に変身した。

剣もスコープオンワームに変身した。

『ガアアアッ!』

スコピオンワームは、サソードMに走り出した。

「くっ！」

ガギン！

サソードMは、サソードヤイバーの刃でスコピオンワームの両手に付いている刃をガードした。

ギギイ・・・

サソードMは、ガードしていたがスコピオンワームの方が力強く後ろに後退された。

カチッ！

サソードMが間違ってサソードゼクターの尾を押した。

サソードMの上半身の鎧が動き始めた。

『cast・off！』

パリイイイイツッ！！

上半身の鎧が分解して飛び出した。

『change・Scorpion』

胴体が蠍の胴体を象った鎧に変わり両肩も蠍の両鋏の形に変化しヘルメットの辺りも大きい緑の瞳をした形に変わり仮面ライダーサソ

ードライダーフォーム（今後の呼び方は、サソードRと略す。）
に変形した。
シュッ！

スコピオンは、姿が消えるとサソードRが周囲を確認する。

ドカーン！

「ぐあっ！」

サソードRは、周囲をよく見ると通常では見えない程の速さでスコピオンフォームがサソードRに攻撃した。

『鍵！ベルトの腰を押せ！』

「！？」

サソードRは、驚きながらもベルトの腰を押した。

カチッ！

『clock・upp！』

ベルトの腰のボタンを押すと周囲がゆっくりと流れている。

シュッ！

「！」

ガシッ！

今まで見えない程の速さで攻撃していたスコピオンワームの動きが通常の動きとして見れた。

そうサソードRが押したボタンは、clock・upと言う周囲の速さが1000倍遅くなる代わりにclock・upをした人間は1000倍の速さでワームが使うスピードと同じ位活動できるマスキュライダーシステムの一つである。

『鍵！サソードゼクターをもう一度押せ！』

ガチャッ！

『rider・slash！』

サソードRは、サソードゼクターの尾を押すと電子音と共に黒い液体と緑色の粒子が刃先から出た。

しかし

「出来ない・・・」

サソードRは、rider・slashをするのに躊躇った。

『馬鹿者！』

スコピオンワームは、サソードRに力強く攻撃を放つ。

「くっくっく・・・」

サソードRは、懸命にサソードヤイバーで防ぐ。

パシーン！

パシーン！

『どうした！俺を倒せ！殺せえっ！！』

スコープオンワームは、徐々にサソードRを追い詰めた。

『殺してくれ！殺してくれッッ！！！』

スコープオンワームの口調がサソードRに攻撃する度に苦しみを増す。

「ウオオオオオオッ！」

ドシン！

サソードRは、サソードヤイバーでスコープオンワームを薙払った。

「・・・ライダー・スラッシュ！」

カチッ！

『r i d e r ・ s l a s h ！』

サソードRは、覚悟を決めると再びサソードゼクターの尾を押してライダー・スラッシュを発動させる。

「ハアアアアアツツ!!」

シュパアアアアツツ!!!

サソードRは、ライダー・スラッシュをスコピオンワームに放つと一撃で倒した。

ボタン!

スコピオンワームは、擬態の剣に戻った。

「剣センパイ!」

サソードRは、変身を解除して鍵に戻った。

「剣センパイ!しっかりしてください!」

鍵は、懸命に剣を呼び掛ける。

「よく・・・やったぞ・・・それでこそ・・・頂点に立つ男の後輩だ・・・」

ボタン!

剣は、眠る様に息を引き取った。

「剣くん!」

一人の女性が息を引き取った剣の元に駆け寄る。

「剣くん!目を覚ましてよ!剣くん!!」

女性は、泣きながら剣を呼び掛けた。

女性は、鍵の所に歩み寄った。

パン！

「貴方が剣を殺したのね！剣くんを返してよ！」

女性は、鍵の頬に平手打ちすると怒鳴り散らした。

「すいません・・・すいません・・・すいません・・・」

鍵は、すいませんを言い続けた。

「岬さん！落ち着いて！」

女性：岬祐月を後ろから青い身体に赤い瞳をした仮面ライダーガダツクライダーフォーム（今後の呼び方はガダックRと略す）に止められた。

ガダックRは、岬と剣の遺体を連れて工場を去った。

しばらく杉崎は、その場を立ち竦んだ。

「ウワアアアアアアアアアッ！！」

杉崎の悲しみは、工場の周囲からも聞こえる音だった。

それから時は過ぎた。

プロローグ：悲しき継承（後書き）

次回は、剣が死んでからの杉崎のストーリーです。

一話：新たな敵の出現（前書き）

生徒会の一存のアルのキャラクターが出てきます。

一話：新たな敵の出現

剣が死んで数週間が経った。

「暇だな〜・・・」

杉崎鍵は、公園の近くに愛車のバイクを止めてベンチで寝転んでいた。

年を偽って自動二輪免許を取った。

「ん？」

杉崎は、何かに感じて振り返ると女性が逃げていた。

「あっ！」

ボタン！

女性は、地面の石に躓いて倒れた。

「大丈夫ですか？」

杉崎は、駆け寄って女性に聞いた。

「！？」

杉崎は、女性の後ろから黒ずくめの男達がやって来た。

「その娘を渡せ。そうすれば命ばかりは、取らない。」

黒ずくめの男の一人が杉崎に警告する。

「ジイヤさんが言っていた。男が決して守らなければならないのが2つある。一つは、女性を守る事。そして人として曲がった道に入らない事だ。」

「そうか・・・なら死ね！」

黒ずくめの男達は、異形の蜥蜴の怪物に変わった。

杉崎は、サソードヤイバーを構えた。

『standby!』

「変身！」

『Henshin!』

杉崎は、サソードMに変身した。

『があああつ!』

蜥蜴の怪物達は、サソードMに襲い掛かる。

「はあつ！」

サソードMは、両腕に繋がっているチューブを蜥蜴の怪物数体に絡ませると身動きが取れなかった。

グサッ！

サソードMは、頭の蠍の尾から黒い液体：ポイズンブラッドを残りの怪物数体に放った。

『ガアアアアッ！！』

ドカーン！

蜥蜴の怪物数体は、サソードMのポイズンブラッドが宿る尾に当たり爆発した。

「トリヤアアアッ！！」

スパッ！シュパッ！

サソードMは、サソードヤイバーでチューブで絡まっている怪物諸共、上段斬りと下段斬りを使い全て倒した。

パンパン！

「！」

サソードMは、振り向くと自分より年が2、3上のスーツ姿の男が立ってSMに拍手した。

「ほお〜う・・・なかなか良い動きをするな。」

男は、サソードMを良評価した。

「誰だ？」

「我が名は、^{エコーオブデス}残響死滅。^{ドラグーン}ウヌが倒した者達は、我等竜戦族の下級戦士^{リザード}の蜥蜴兵士だ。」

^{ドラグーン}「竜戦族だ？」

サソードMは、今までワームを倒して来たがワーム以外も未知の存在を知らなかった。

「次元の彼方に住む戦闘民族だ。その^{ドラグーン}竜戦族の巫女を渡してもらおうか。」

^{エコーオブデス}残響死滅は、向こうにいる女性を指差した。

「い・・・いや・・・いや！」

女性は、目尻から涙を流しながら足が震えている。

「さあ・・・さあっ！」

^{エコーオブデス}残響死滅は、そのまま女性に近付く。

ガシッ！

「？」

女性は、脅えていると誰が自分と^{エコーオブデス}残響死滅の前に立っていた。

「やめる！」

サソードMが自分の左手で残響死滅エコーオブデスの右手を強く握り締めた。

「これは、ウヌに関係のない事だぞ？」

「泣いている女の子を見て黙っていられるか！」

残響死滅も睨んだがサソードMも睨み返した。
エコーオブデス

「仕方ない。」

残響死滅は、黒い飛龍の様な怪人に変身した。
エコーオブデス

ビリイイイイツツ！！

残響死滅は、背中から電撃をサソードMに放った。
エコーオブデス

「っ！」

ガシッ！シュッ！

サソードMは、女性を抱きかかえるとジャンプして回避した。

「改めて言おう。我が別名は、竜戦族雷龍王。
ドラグーン ヴァリトラ 竜戦族6将軍が一人。
ドラグーン

人間の姿と違いサソードMに対して殺気が混じっていた。

ガチャッ！

サソードMは、サソードヤイバーの尾を押した。

「キャスト・オフ！」

『cast・off』

『change・scorpion』

サソードMは、サソードRに変形した。

「クロック・アップ！」

ガチャッ！

『clock・up』

サソードRは、clock・upで^{ヴァリトラ}雷龍王に攻撃を仕掛ける。

「sonic・shift！」

^{ヴァリトラ}雷龍王は、奇妙な言葉を言うとサソードRと同じ速度に変わる。

「はあっ！」

ギイン！

「！？」

サソードRは、^{ヴァリトラ}雷龍王の懷に斬りかかろうとしたが自分の右手でサ

ソードヤイバーを防いだ。

「どうした？それがウヌの全力か？」

ヴァリトラ
雷龍王は、サソードヤイバーを防いだ右手に電撃が宿る。

ビリイイイイツー！！

ヴァリトラ
雷龍王が電撃を瞬時に放った。

「っ！プット・オン！」

ガチャッ！

『put・on！』

サソードRは、サソードヤイバーに装着しているサソードゼクターの尾を反対に引きマスクドフォームに戻る。

しかし！

パリイイイインッツ！！

「ぐああああっ！！」

ボタン！

ヴァリトラ
雷龍王の電撃は、想像以上のダメージでマスクドフォームに付いてあるチューブやコアの部分が半壊した。

「やるな・・・だが！今の我が放った電撃では、ウヌの鎧も意味がない！」

「ぐううう！」

サソードMは、立っているのもやっとでサソードヤイバーを杖代わりにしていた。

「大人しく竜戦族の巫女を渡せ。」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、女性を指差した。

「・・・けるな・・・ふざけるな！」

サソードMは、声を荒れて言う。

「お前みたい な女の子を物としか見ない奴に屈するか！」

「良いだろう・・・なら死ね！」

雷龍王^{ヴァリトラ}が再び電撃を放とうとした。

パキューン！

「ぐっ！？」

突然空から赤いカブトムシのロボットが雷龍王^{ヴァリトラ}の邪魔をした。

「お婆ちゃんが言っていた。男が決してやってはならない事は、2つある。一つは食べ物を粗末にする事と二つは、女の子を悲しませ

る事だ。」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、見ると一人の男がいた。

「ウヌは、何者だ？」

「俺は、天道総司。天の道を行き総てを司る男だ。」

天道は、空に指差して言う。

ガシッ！

天道は、カブトムシのロボットを片手で握ると腰に巻いているベルトに装着した。

「変身！」

『Henshin!』

天道は、青い瞳をした赤い仮面ライダー：仮面ライダーカブトマス
クドフォーム（今後の呼び名でカブトMと略す）に変身した。

一話：新たな敵の出現（後書き）

次回：仮面ライダーサソード

「そこまでだよ。エコーオブデス 残響死滅。」

「ウヌは、デッドオアライフ 生死境界線!？」

次回！二話：天の道を行き総てを司る男VSエコーオブデス 残響死滅

二話：天の道を行き総てを司る男VS残響死滅（エコーオブデス）（前書き）

天道と残響死滅^{エコーオブデス}の戦いが始まります。

二話：天の道を行き総てを司る男VS残響死滅（エコーオブデス）

カブトMは、ベルトに装着されているカブトゼクターの角を動かした。

「キャスト・オフ！」

『cast・off』

カブトMは、上半身の鎧が分解して顎に下向きの角が上がってカブトムシの角に変形する。

『change・beetle』

カブトMは、仮面ライダーカブトライダーフォーム（今後の呼び名はカブトRと略す）に変形した。

「クロック・アップ！」

ガチャッ！

『clock・up！』

カブトRは、ベルトの横を押すとクロック・アップした。

「sonic・shift！」

ヴァリトラ
雷龍王もソニック・シフトを発動させた。

「とう！はあっ！はあっ！たあっ！」「」

カブトRと雷龍王^{ヴァリトラ}は、お互いに引きを取らない動きで戦っている。

しかし！

「たあっ！」

ドシン！

「くっ！」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、瞬時にカブトRの脇腹を殴る。

「とどめだ！」

ビリイイイッ！

雷龍王^{ヴァリトラ}は、サソードRに与えた電撃をカブトRに当てようとした。

「たあっ！」

ドシン！

「くっ！」

カブトRは、回し蹴り^{ヴァリトラ}で雷龍王の後ろ首辺りを直撃させて体勢が崩れる。

『1！2！3！』

カブトRは、カブトゼクターのボタンを三回押した。

ガチャッ！

カブトRは、ベルトのカブトゼクターの角を再度動かす。

「ライダー……キック！」

ガチャッ！

カブトRは、カブトゼクターの角を元に戻した。

『r i d e r ・ k i c k ！』

カブトRの角からタオキン粒子が出てそれが右足に集中する。

「はあっ！」

カブトRは、カウンターキックを^{ヴァリトラ}雷龍王に放った。

「ぐあああああっつ！」

^{ヴァリトラ}雷龍王は、数メートルも後退した。

『c l o c k ・ o v e r ！』

電子音と共にクロック・アップの終了を表すクロック・オーバーが鳴り響き通常の速さの世界に戻る。

「ぐっ……まさか、この我が人間如きに油断をするとは……」

ヴァリトラ
雷龍王は、エコーオブデス残響死滅に戻り腹部を抑えた。

「貴様は、自分自身に対して自信過剰だから俺に負けたんだ。お婆ちゃんが言っていた。油断する奴程大きなミスをするってな。」

「まだだ！」

エコーオブデス残響死滅は、立ち上がった。

「そこまでだよ。エコーオブデス残響死滅。」

突然、何処からか眼鏡をかけた別の男がいた。

「ウヌは、デッドオアライフ生死境界線！？」

エコーオブデス残響死滅は、驚いた。

「何故ウヌがこの世界に！？」

「いや……何ね。僕等が主、カオスロード混沌君主の命で君を連れ戻しに来ただけだよ。」

「しかし！カオスロード混沌君主から巫女の捕獲の命を我に！」「未知の敵が現れたから撤退しなだって。」「くっ！わかった……」

エコーオブデス残響死滅は、主の命令に逆らえなかった。

「覚えておけ！次こそは、ウヌ等を必ず倒す！」

パリーイイイインッ！

エコーオブデス
残響死滅は、カ一杯叩くと次元の穴が開き^{デッドオアライブ}生死境界線と共に消え去った。

二人が消え去ると次元の穴も消えて元通りに直った。

ボタン！

「しっかりしてください！」

巫女は、突然倒れたサソードMの元に駆け寄る。

サソードMは、気絶した事でサソードヤイバーに装着していたサソードゼクターが解除して杉崎鍵に戻った。

「やれやれ・・・人気者の座を取られたな・・・」

そう言いつつもカブトRは、ベルトからカブトゼクターを解除して天道に戻り杉崎の所に行く。

「……ん？此処は？」

杉崎は、目を覚ますと違う場所にいた。

「杉崎様！お気付きになりましたか。」

目の前には、ジイヤと天道の姿がある。

「オレ……どうして此処に……っ！」

杉崎は、起き上がろうとしたが胸部の下辺りが激痛を發した。

「無理をするな。三日前の戦闘で肋が数本折れているんだぞ。それにお前に何かあればその娘が悲しむ。」

天道が杉崎が寝ているベットの隣で女性が寝ていた。

「三日間、寝ずにお前の看病をしていた。その娘を心配させるな。」

「そうでしたか……」

杉崎は、ベットに再び仰向けで寝る。

「本当にありがとうございます。」

天道は、ジイヤにお礼を言う。

「いいえ。杉崎様は、坊ちやまの大切な後輩でございます。杉崎様に何かあれば亡くなった坊ちやまに会わす顔がございません。」

天道は、その後ジイヤに任せて神代邸を後にした。

「ふむ……この格好は、我には落ち着かぬ。」

暗い宮殿の通路で残響死滅は、頭しか見えない程のマントと甲冑の格好が気に入らなく眉間に皺を寄せた。

「仕方ないさ。ドラグーン竜戦族六将軍がみんな集合するだからね。」

笑顔で生死境界線も不機嫌な残響死滅と同じ姿で宿めた。

「おやおや！誰かと思えば敵に油断した残響死滅じゃないか？」

「「！？」」

二人は、声のする方を向くと短髪に左頬に傷が印象的だった。

「ウヌか……ムーンイリュージョン月幻影。」

エコーオブデス残響死滅は、ムーンイリュージョン月幻影を軽視した。

「仮にも竜戦族六將軍がたかが一人の人間に負けるとはな！」
ドラグーン

「何だと!?!」

エコーオブデス ハンイリュージョン
残響死滅と月幻影は、睨み合う。

「主等その位にしておけ！」

また別の男が来た。

その男は、左右の目の色が違っていた。

「久しぶりだね！氷雪悪魔。」
フロストジョーカー

デッドオアライブ フロストジョーカー
生死境界線が氷雪悪魔に挨拶をする

「うむ。」

フロストジョーカー デッドオアライブ
氷雪悪魔は、生死境界線に挨拶をした。

「テメー達も此処にいたか！」

「……」

また別の男二人が来た。

一人は、六人の中で大きい男。

二人は、目に包帯を巻いた無口な男だった。

「ガイアエターナル　ダークネススター
大地永遠に暗黒流星か。」

エコーオブデス
残響死滅は、二人の名前を呟く。

「全員揃った様だね！じゃあ混沌君主の居る神龍の間に行くか。」

ドラグーン
竜戦族六將軍は、混沌君主の元に向かう。

神龍の間の前には、カプセル状の培養液の中に竜戦族の巫女達が一
人一人入って眠っていた。

「『混沌君主！我等竜戦族六將軍参りました！』」

ドラグーン
竜戦族六將軍は、神龍の間の玉座に座る30代後半の男が座っている。

「よくぞ来た！竜戦族六將軍。」

二話：天の道を行き総てを司る男VS残響死滅（エコーオブデス）（後書き）

次回：仮面ライダーサソード

「君の名前は？」

「私は、リユオーネー・・・」

「巫女を渡せ。下等な人間よ！」

「お前等竜戦族^{ドラグーン}は、許さない！」

次回！竜戦族^{ドラグーン}の巫女秘密

三話：竜戦族（ドラゲーン）の巫女の秘密

パシィーン！パシィーン！

「やあっ！ハアッ！」

数日後杉崎は、神代邸の剣道道場に胴着を着て竹刀で竹の棒数本を叩いている。

杉崎は、竹刀を構えて目を閉じる。

「神代孤月流……」

キィッ！

杉崎は、目を開けると一瞬で凄い気迫を放った。

「空月！」

シュッ！ズパッ！

杉崎は、足を少し動いたと思えば一瞬で竹の棒数本の反対側にいた。

スッ……

杉崎は、竹刀を納めると

パキッ！

竹の棒数本が割れたが外側から割れたのではなく内側から割れた。

「ふう……（まだまだだな。もっと強く成らないと！）」

杉崎は、息を吐くと一息入れる。

「杉崎様。お茶をお持ち致しました。」

道場の入り口でジイヤがお茶の差し入れを持って来た。

「ありがとうございます！ジイヤさん。」

杉崎が道場で稽古をしていると別の場所では、巫女の女性が神代邸の庭で座っていた。

女性は、悲しい表情で椅子に座って俯いていた。

「？」

女性は、床に何か居るのを感じて見るとサソードゼクターがいた。
「なくさめてくれるの？」

コクン！

サソードゼクターは、ジャンプしながら頷く。

スッ

女性は、サソードゼクターを手の平に乗せた。

「ありがとう。」

女性は、笑顔に変わる。

ピヨンプيون！

何故かサソードゼクターも嬉しそうに動く。

「ん？」

杉崎は、稽古を終えて胴着から私服に着替えて庭に行くと女性とサソードゼクターが居て女性が笑っていた。

「やっと笑顔に成ったんだね。」

杉崎が女性とサソードゼクターの居る場所に向かい言う。

「オレは、杉崎鍵。君の名前は？」

「・・・・・・・・」

女性は、突然杉崎が来て戸惑っている。

「君の名前は？」

杉崎は、もう一度聞いた。

「リュオーネー・・・」

女性は、杉崎に自分の名前を告げた。

「リュオーネーか・・・良い名前だね。」

杉崎は、笑顔でリュオーネーに言う。

ドキン！

リュオーネーは、杉崎の笑顔を見た瞬間顔を真っ赤にした。

「大丈夫？」

「／／／／・・・いいえ！何でもありません！」

リュオーネーは、自分でも解らない感情に戸惑った。

「もう直ぐジイヤさんが朝食出来るから家に入ろう。」

コクン

リュオーネーは、頷いて家の中に入った。

「今日の朝食は、鮎の塩焼きに白米と油揚げとお豆腐のお味噌汁に
ございます。」

ジイヤが今日の朝食のメニューを言う。

「・・・・・・・・」

リュオーネーは、啞然として見る。

リュオーネーの居た世界とは、違う食べ物で食べ方が解らなかった。

「リュオーネー、白米はねこの二本のお箸と呼ばれる物で食べるんだよ。」

杉崎がリュオーネーにお箸の持ち方や食べ方を優しく説明した。

「ありがとうケン。」

リュオーネーは、初めて人に対して笑顔になる。

「では本題に入ろう。」

カオスロード
ドラグーン
混沌君主は、竜戦族六將軍に集まった理由に入った。

「エコーオブデス残響死滅を邪魔した者共は、仮面ライダーと言いつその世界の守護者達だ。」

カオスロード混沌君主は、ドラグーン竜戦族六將軍に敵の正体を明かした。

「その役目！自分にお任せを！」

ムーンイリュージョン「月幻影……よかろう！」

「お待ちを！」

エコーオブデスすると残響死滅が立ち上がった。

カオスロード「お待ちください！混沌君主！もう一度だけチャンスを！次こそは
ムーンイリュージョン我が必……。「今回は、月幻影に任せてソナタはゆっくりと静養
するがいい。」……御意……。」

エコーオブデス残響死滅は、悔しい顔をした。

カオスロード混沌君主は、ムーンイリュージョン月幻影に任命されて会議を終わった。

杉崎とリュオーネーは、街に出掛けていた。

リュオーネーは、竜戦族に追われていて元々着ていた服も当然の事ながらボロボロだった。

そこで杉崎は、リュオーネーの新しい服を買ってあげると同時にこの世界の社会の仕組みを教えようと思った。

今リュオーネーが着ているのは、白いパーカーにジーンズを着ている。

「ケ・・ケン！その柱が赤く光ったり青く光ったりしていますよ！」

「ああ、それは信号機だよ。」

「シンゴウキ？」

リュオーネーは、不思議そうに見詰めている。

「ケン！あの壁に映っているのは？」

「テレビだよ。」

彼女からして見れば珍しくて仕方ない物ばかりだった。

「ちょっとそこの貴女。」

リュオーネーの後ろからギターケースを持った男と少女がいた。

「私は、貴女を見て「風間さん、何しているんですか？」君は、杉

崎鍵。」

杉崎は、この風間大介と言うメイクアップアーティストとは知り合いで彼もトンボのモチーフの仮面ライダードレイクの所有者である。

「貴方の知り合いですか？」

「ええ、そうですけど。」

杉崎の言葉を聞くと風間は、リュオーネーに近寄る。

「全ての女性は、美しく成る権利がある。特に貴女は、天空から舞い降りた……えっと……「女神様。」そう！そう！それ！それ！」

風間のフォローした少女は、風間のアシスタントをしている高山百合子：通称ゴンである。

「風間さん、オレ達これからリュオーネーの服を買いに行くんです。良かったら一緒に行きませんか？ゴンちゃんが居れば可愛い服とか解りますし。」

「わたしは、良いよ。大介は？」

「当然だよ。全ての女性を美しくするのが私の義務だからね！」

風間は、笑顔でゴンに答えて杉崎達と一緒にショッピングモールに行く。

「大介や杉崎は、見たらダメだからね！」

ショッピングモールのレディース専門店に着くとゴンは、リユオーネーに合った服を素早く選び試着室にリユオーネーが入るとゴンが試着室の入り口に立って見張っていた。

「風間さん……ゴンちゃんすっかりした保護者ですね……」

「君も彼と同じ事を言いますね。」

ちなみに風間が彼つと言う人物は、天道である。

「ゴンちゃん！これどうやって着るの？」

試着室にいるリユオーネーがゴンに聞く。

「……!?」

杉崎と風間は、試着室にギリギリで近付くが「ダメって言っているでしょ！大介！杉崎！」

ゴンは、二人に睨み付けて試着室に入る。

「待っていた方が良いでしょうね……」

「その意見に賛同します。」

杉崎が言つと風間も同じ意見だった。

杉崎のスケベは、風間の影響である。

「お待たせ！」

ゴンが試着室から出るとリュオーネーも出て来る。

「「おおっ！」」

リュオーネーは、白くフリフリのロングスカートのワンピースの上にジーンズの上着とヒールが高い靴着て長い金髪を靡かせて大人っぽくイメージが増す。

「あ・・・あの・・・ケン・・・私似合わない？」

リュオーネーは、オドオドしながら杉崎を見つめる。

「そんな事無いよ！いつその事オレの嫁に！」「杉崎！何を言っているんですか！？私が貴女を幸せに」「何言っているの！二人供！」「「すいません・・・」」

杉崎と風間の言葉に戸惑うリュオーネーを見た gon は、二人に怒鳴る。

「それでは、風間流奥義・・・アルティメットメイクアップ！」

風間は、ギターケースからメイク道具を取り出すと何時ものスケベと違って素早い動きでリュオーネーの顔をメイクアップした。

「っ！？／／／／」

杉崎は、風間にメイクアップをして貰ったリョォーネーを見て顔を真っ赤に成る程の綺麗な顔立ちのリョォーネーにキレがかった。

「それでは私とお茶でも」大介、次の仕事に行くよ。じゃあね杉崎、リョォーネーさん。」えっ！？ちよつと待ってくれゴン・・・」

風間は、ゴンに襟を掴まれて何処かに向かった。

「じゃあ行こうか？リョォーネー。」

「うん。」

杉崎は、リョォーネーを連れて動物園に行く。

「此処が地球か・・・」

△インイリョージュン
月幻影は、高層ビルの高い場所から街を見下ろしていた。

「じゃあ始めるか・・・」

月幻影は、目を瞑ると陽炎が月幻影の周囲から現れた。

「！」

月幻影は、目を瞑ってしばらくするとリュオーネーの姿を見た。

「見つけたぞ。」

月幻影は、そのまま陽炎と共に消えてしまった。

「うわぁ……」

リュオーネーは、見た事無い動物達を見て啞然とする。

「パオオーン」

「ウツキツキツ！」

「メ……」

リュオーネーは、動物達に興味を持ち見続ける。

「ケン、あの首の長い動物は？」

「麒麟だよ。」

杉崎が説明するとリュオーネーは、麒麟の餌をあげるコーナーに向かう。

ムシャムシャ

麒麟は、その長い舌を使って草を食べている。

ジ〜〜

ビクッ

麒麟は、リュオーネーの持っている草が自分の視界にある事に気付きリュオーネーが驚く。

スッ

「？」

リュオーネーは、後ろを見ると杉崎がいた。

「大丈夫だよ。オレも付いているから。」

リュオーネーは、杉崎が居る事で安心したのか麒麟の前まで来た。

スッ

リュオーネーは、勇気を出して麒麟に草を近付ける。

カプツムシヤムシヤ

キリンは、リユオーネーが与えた草を食べ始めた。

「ありがとうケン。でも怖くないの？」

「あっはっはっはっはっ♪ 大丈夫だよ。それよりも怖い経験したから……」

回想シーン

剣が生きて居る頃杉崎は、己自身の恐怖に打ち勝つ為にサファリパークに来ていたしかも徒歩で。

「スギードーレー！さあ今から今日の稽古だぞ！」

剣は、胴着と竹刀を持っていた。

「無理ですよ！生身でライオンやトラを相手するなんて！しかもハイエナが遠回しでオレの死体の残りを食おうと考えていますよ！」

杉崎も剣と同じく胴着と竹刀を持って剣に抗議する。

「俺は、倒せるぞ！ハアッ！」

パシーン！

「ガオ……」

剣の後ろからトラが襲って来たが剣が竹刀で素早く前脚数回と頭十

数回を直撃させてトラが怯ませる。

「これが見本だ！」

「説得力ありませんよ！」

「ガオオオツ！」

「ガアアアア！！！」

次々とトラやライオンが杉崎に襲い掛かる。

「ウオオオオオオ（ヤケクソ中）！！！」

杉崎は、死に物狂いでライオンやトラと竹刀で戦い数時間後全ての猛獣を倒して気絶すると剣に抱き抱えられて翌日また同じ様に違ったサファリパークで稽古を一ヶ月していた。

回想シーン終了

「猛獣じゃないって良いよな……」

「ケン？」

リュオーネーは、杉崎の目から涙を流しながら何かに思い出している事に疑問になる。

「何か勝って来るけど何が良い？」

杉崎は、近くの売店で飲み物を買うので聞く。

「私この世界の食べ物あまり解らないからケンにお願いする。」

リュオーネーは、杉崎に任せた。

「じゃあ此処で待っていてね。」

杉崎は、リュオーネーをベンチに座らせると売店に行った。

「見つけたぞ竜戦族の巫女。」
ドラグーン

リュオーネーの右斜めの方から月幻影がやって来る。
ムーンイリュージョン

「っ！？月幻影！」
ムーンイリュージョン

リュオーネーは、咄嗟に逃げ出した。

「ふふふ！逃がさん！」

月幻影は、逃げ場所を解るかの様にゆっくり近寄り続ける。
ムーンイリュージョン

「リュオーネー、お待たS……」

杉崎は、飲み物を持って来るとリュオーネーの姿が無かった。

ピョンピョン！

「サソードゼクター？どうして此処に……まさか！リュオーネーに何かあったのか！？」

コクン！コクン！

サソードゼクターは、頷いた。

「リュオーネー！」

杉崎は、サソードゼクターが何処かに行くのを見て追い掛ける。

「ハアツ！ハアツ！ハアツ！」

リュオーネーは、ハイインリジョン月幻影から二時間必死で逃げる。

ガシッ！

「捕まえたぞ！」

ムーンイリュージョン
月幻影は、リュオーネーの髪を片手で掴んだ。

「いやあ！いやああ！！」

リュオーネーは、必死で逃げ出そうとしたが髪を強く引つ張られて逃げられ無かった。

「そう嫌がるなよ！」

ムーンイリュージョン
月幻影は、不敵に笑う。

すると……

ドガァン！

「くっ！」

地面からサソードゼクターが現れて月幻影の脇腹に体当たりしリュオーネーを放した。

「リュオーネー！」

正面から杉崎が走りながらやって来る。

「ケン！」

リュオーネーは、咄嗟に杉崎の元に駆け寄る。

「！」

杉崎は、リュオーネーのボロボロの姿を見て驚く。

「大丈夫だよ。もう安心して良いよ。」

「うん……」

リュオーネーは、安心したのか杉崎の胸元で眠りに入った。

「人間のガキよ。ドラグーン竜戦族の巫女を渡せ。」

ムーンイリュージョン月幻影は、杉崎の胸元で眠りに入ったりリュオーネーを渡す様に命ずる。

「お前らは、何で寄って集ってこんな少女を追い詰めるんだ……」

「

杉崎は、ムーンイリュージョン月幻影に聞く。

「フンツ！知った所で意味は無いが教えやろうガキ。ドラグーンその巫女は、我々竜戦族の目的の為の道具の一部にしかない。」

「道具の一部……」

杉崎の目の色が変わった。

「良いだろ教えてやろう。ドラグーン竜戦族の女性には皆魔力が強く巫女に成る。ドラグーンなぜだか解るか？それは、我々竜戦族の発展の為の礎で子供を孕み必要なエネルギー資源の為に使う存在だ。特にその娘は、魔力が一番長けている。言わば貴重な道具なんだ！」

「・・・・・・・・・・」

ギリッ！

杉崎は、サソードヤイバーを血が出る位握り締めた。

「巫女を渡せ。下等な人間よ！」

「お前等竜戦族は、許さない！」
ドラクーン

『standby』

サソードゼクターが杉崎の右手に来た。

「変身！」

『Henshin』

杉崎は、左手で持つてるサソードヤイバーをサソードゼクターに装着されるとサソードMに変身した。

「ふふふ！そうじゃないとつまないからなあ！！」
ムーンイリユージョン

月幻影は、皮膚が黒く成り目が炎の様な色、頭が龍の頭に变化しお尻の辺りが鋭い尻尾が生え、背中から大きな羽根が現れ体もドラゴンの体型に変わる。

「言うのが遅れたな。オレは、月幻影、またの名は荒ぶる竜戦族の
ムーンイリユージョン
狂龍王だ！」
ジャバウオック

狂龍王は、そのままサソードMに攻撃を開始する。

「くっ！」

サソードMは、瞬時にサソードヤイバーが狂龍王ジャバウオックの攻撃を防ぐ。

「っ！たあっ！」

サソードMは、狂龍王ジャバウオックの攻撃をかわすとサソードヤイバーで攻撃する。

ガキーン！

「何！？」

サソードMは、サソードヤイバーで傷付かない狂龍王ジャバウオックの体の強固さに驚く。

「どうした？どうしたあ！？」

ドォーン！

狂龍王ジャバウオックは、鋭い尻尾でサソードMを振り払う。

「ぐああ！」

サソードMは、跳ばされたが体勢を変えて回避する。

（固いな……ん？）

サソードMは、思う。

外から攻撃しても駄目なら内側から攻撃すれば良いのか？と。

「（この技を戦いするのは、始めてだがするか。）キャスト・オフ！」

『cast off』

『change scorpion』

「神代孤月流……」

サソードRに変わるとサソードヤイバーを両手に持って構える。

「空月！！」

シュッ！

サソードRは、一瞬で^{ジャバウオツキ}狂龍王の後ろに居た。

「？」

キョロキョロ

^{ジャバウオツキ}狂龍王は、自分の体に何かが起こったのを見渡した。

「ふふふ……ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！何にも起こらないじゃないか！」

^{ジャバウオツキ}狂龍王は、サソードが弱いと思いき笑い出した。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッ……グブッ！」

ジャバウオッキ
狂龍王は、突如口から青い液体を吐いた。

「な・・・何だ？これは・・・！」

「神代孤月流・空月。お前の体は、想像以上に強固な身体だ。ただし、それは外側だけで内側からの攻撃には弱い。この技は、内側から攻撃する場合だけに使う技だ。」

「い・・・言わせておけば！」

ジャバウオッキ
狂龍王は、サソードRに襲い掛かる。

「クロック・アップ！」

『clock・up』

「sonic・shift！」

サソードRがクロック・アップをすると狂龍王もジャバウオッキ
sonic・shiftを発動させる。

「タアッ！」

「ハアッ！」

バキーン！バキーン！

ジャバウオッキ
サソードRと狂龍王は、お互いに得意の攻撃を放っては防御や回避を繰り返す。

パキーン！

「ウガアッ！」

先に攻撃を当てたのがサソードRだった。

ジャバウオッキー
狂龍王は、サソードRの攻撃に当たると怯んだ。

「ライダースラッシュ！」

ガチャッ！

サソードRは、サソードゼクターの尻尾を押した。

『rider・slash』

電子音と共にタオキン粒子とポイズンブラッドがサソードヤイバーの刃先から溢れ出る。

「タアアアアッッ！！」

サソードRは、そのまま^{ジャバウオッキー}狂龍王に向かって斬り放つ。

ズパアアアアアッッ！

「ガアアアアアア！」

『clock・over』

ドカアアアアアアッ！

クロック・アップが終了すると狂龍王は、ジャバウオッキー爆発し粉々に成った。

「まあ……あの人間の手助けする事も無かったか……」

サソードRと狂龍王ジャバウオッキーの戦いを遠くから眺めていた氷雪悪魔フロストジョーカーは、戦いの結果を知ると吹雪と供に消えた。

「……ん？」

リュオーネーは、目を覚ますと杉崎の背中で寝ていた。

「気付いたリュオーネー？」

杉崎は、リュオーネーを背負いながら歩いていた。

「私一体？」

「安心して月幻影^{ムーンイリュージョン}は、俺が倒したから。」

リュオーネーは、杉崎の言葉を聞くと安心した。

「ケン……私ねこうやって背負われていると昔を思い出すの。」

「昔？」

「うん。私には兄が居たの……凄く優しい兄が。」

「へ……」

「小さい頃何時も兄は、私が遊び疲れていると直ぐに自分の背中に私を背負って歩いていったんだ。」

リュオーネーは、何故か懐かしく語った。

「兄は、私と同じ青い宝玉を持っているんだ。」

リュオーネーは、首に付けていたネックレスを杉崎に見せる。

「綺麗な宝玉だね。」

「うん。兄が始めて自分の術で作った錬金術なんだって。」

リュオーネーは、神代邸に着くまで兄の話を杉崎にした。

「・・・・・・・・」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、首に付けている青い宝玉を眺めた。

「やあ！氷雪悪魔。」
フロストジョーカー

「生死境界線（デッドオアライブ。）」

ムーンイリュージョン
「月幻影がアノ紫の奴に倒されたんだって!？」

「当然だ。いくら竜戦族六將軍とは言え油断したから自滅したんだ。」

「あーあー……手厳しいなあ氷雪悪魔は……」

デッドオアライブ
生死境界線は、そう言いつつ納得した。

カオスロード
「混沌君主は、次に大地永遠を出すって言っよ。」

「まあ何にせよ。大地永遠も月幻影の様に成らない様にする事だな。」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、そのまま去る。

フロストジョーカー
（君も油断しない方が良いかもよ氷雪悪魔。）

デッドオアライブ
生死境界線は、不適に笑い消えた。

三話：竜戦族（ドラゲーン）の巫女の秘密（後書き）

次回：仮面ライダーサソード。

「人間とは儼等に比べて弱いんじゃないのぉ！」

「リユオーネー……………」

次回第四話：兄妹^{きょうだい}

四話：兄妹（きょうだい）

「・・・・・・・・」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、自分の部屋で瞑想を行っている。

兄さん・・・・兄さん！

記憶の中では、少女が自分の名前を呼びながら走り出すが転倒し泣き出す。

リュオーネー大丈夫か？

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、少女の事をリュオーネーと呼び駆け寄る。

痛いよオ・・・・歩けないよオ・・・・

じゃあオレの背中に乗れ！運んでやるから。

うん
♪

リュオーネーは、機嫌を直して氷雪悪魔の背中に乗る。
フロストジョーカー

兄さん！

ん？

ずっと・・・・ずっと私の味方だよね？

ああ、そつだぞリユオーネー。

「・・・・・・・・」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、瞑想を解いた。

「行くとするか・・・・・・・・」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、再び目を閉じると吹雪と共に消えた。

?????

【・・めろ・・・・・・・・目覚めろ・・杉崎鍵！】

「ん？」

杉崎は、謎の声に反応したのか目を覚ますと大理石で造られたギリシア風の神殿。

外は砂漠地帯が広がる夜だが満月が出ているのか明るかった。

?????

【コツチだ。来い！】

杉崎は、謎の声を追って神殿の奥に歩む。

そして謎の聲がしなく成ると蠍の石像と一本の刀が蠍の石像に刺さっていた。

「コレは？サソードヤイバーに似てるけど少し違うな……………」

杉崎は、石像に刺さっている刀を抜こうとするが…………

?????

【それを抜いてはいけない！】

杉崎は、謎の聲が再び聞こえると止めた。

?????

【そのスコピオンセイバーを抜けばお前は、最後…………修羅と同様の道を背負う事に成る。全てを斬り裂く神サソードに魅入られる者、杉崎鍵よ！】

「誰だ！？」

?????

【俺の名は、このスコピオンセイバーに刺さっている天蠍の像だ。お前には、まだその覚悟が無い。その時まで待っているぞ。】

杉崎の周りが真っ白に変わりフツと気付くとベットに寝ていた。

「ゆ・・・夢か？」

杉崎は、リアル過ぎて記憶に残る夢に驚く。

杉崎は、そのままバイク：サソードエクステンダーに乗りリユオーネーが居る神代邸に向かう。

近くには、ガイアエターナル大地永遠が電信柱の天辺から杉崎を観察している。

「しっかしのオ・・・まさかこんな面倒臭い事をするとはなア・・・」

ガイアエターナル何故大地永遠が杉崎を観察しているのかと言うと混沌君主に出撃の命を受けたには受けたが敵のサソードの観察をして対策を練ると言う命も受けていた。

ムーンイリュージョン「まあ月幻影の様な似の前には成りたくないからのお・・・ん

ガイアエターナル大地永遠は、後ろを振り返ると氷雪悪魔が居た。フロストジョーカー

フロストジョーカー「氷雪悪魔・・・何じゃい？何じゃい？儂によおか？」

「助言しに来ただけだ。」

「助言？」

ガイアエターナル大地永遠は、考えるのは苦手だったので氷雪悪魔のアドバイスがあると聞き好都合だった。フロストジョーカー

「まず貴様の得意の土の魔術でゴーレム達を呼び出してアノ人間の實力を試すが良いだろう。」

ガイアエターナル大地永遠は、フロストジョーカー氷雪悪魔の言葉を聞くと懷から数個の石を投げると両

手を印で結んだ。

「@ § ≠ ∞！」

ガイアエターナル
大地永遠は、奇妙な呪文を唱える。

「ん？」

杉崎は、サソードエクステンダーを止めると岩の怪人：ゴーレムが数体出現した。

「な・・・何だ！？」

【グワアアアア！】

ゴーレムの一体が杉崎に襲い掛かる。

「くっ！」

杉崎は、素早くサソードエクステンダーから降りるとサソードヤイバーを構えた。

『standby』

地面からサソードゼクターが出て来て杉崎が掴む。

「変身！」

『H e n s h i n 』

杉崎は、サソードMに変身した。

【グワアアアア！】

ゴーレム達が次々とサソードMを囲む。

「セヤアツ！」

サソードMは、サソードヤイバーでゴーレム達に攻撃を開始する。

「ほお〜・・・あの人間なかなかの動きをしているのオ。」

ガイアエターナル
大地永遠は、サソードMを観察し始める。

「・・・・・・・・」

フロストジョーカー
冰雪悪魔は、サソードMに眼中が向いていると右手を海龍の様な手
に変化させると鋭利状に変わった爪でガイアエターナル大地永遠の首筋目掛けて斬ろ
うとする。

「やあ！」

「！？」

フロストジョーカー
冰雪悪魔は、直ぐに片手を変化を解いて向くと生死境界線が来ていた。
デッドオアライフ

「ん？おお！生死境界線か！」
デッドオアライフ

ガイアエターナル デッドオアライフ
大地永遠も生死境界線の存在に気付く。

「いやね！僕も少し気になったから来ちゃったんだ。」

デッドオアライフ ガイアエターナル
笑顔で生死境界線は、大地永遠の隣に来る。

（後少しだったのに！）

フロストジョーカー デッドオアライフ
冰雪悪魔は、偶然来た生死境界線が来た事に悔しがる。

「たあつ！とあつ！！」

ザシュツ！ザシュツ！！

サソードMは、次々にゴーレム達の動きの隙を狙っては一刀両断で倒していく。

「ああ！じれったい！！！」

ガイアエターナル
足の痺れを切らせた大地永遠は、電信柱から立ち上がるとサソードMの所に急降下した。

「アノ馬鹿が！」

「あっはっはっはっはっはっはっ！！！！大地永遠は、本当に短気何だ
ガイアエターナル

から！」

フロストジョーカー
冰雪悪魔の前に居る生死境界線は、愉快そうに大地永遠を観戦している。

「お前は！？」

サソードMは、突然来た大地永遠に警戒する。

「僕は、大地永遠！竜戦族六將軍で最も豪快な男じゃ！」

そう言いながら両手を鳴らす大地永遠は、気合が入った状態だった。

そして大地永遠の身体は、岩のような物に形成しティラノザウルスの足、大きな強力の筋肉を持った腕、ドラゴンの頭をした姿に変身した。

「またの名は、地龍王。」

地龍王は、手首に付けている小さい鉄球を一つ外すと強固な鎖が付いた超重量の鉄球に変化して地龍王が鎖を持ち回し始める。

ブン！

「くっ！」

サソードMは、地龍王の攻撃をかわすがこの強烈な攻撃をともに食らったら一溜まりも無い事に気付く。

「どうしたんじゃい！余所見するんじゃない！」

地龍王^{ヨルムンガンド}は、次々と鉄球をサソードMに放ち続ける。

（このままじゃあキリが無い！）

ガチャッ！

「キャスト・オフ！」

『cast・off』

サソードMに付いていたマスクドフォームのパーツ吹っ飛び地龍王^{ヨルムンガンド}の繰り返す鉄球の攻撃を次々と壊す。

『change・scorpion』

サソードMは、サソードRに変形完了する。

「たあっ！」

サソードRは、素早くサソードヤイバーで地龍王^{ヨルムンガンド}に切り裂く。

「甘い！」

地龍王^{ヨルムンガンド}の右手にハンマーが現れ左手もモーニングスターに現れた。

「オリヤ！オリヤ！」

地龍王^{ヨルムンガンド}は、懷に潜り込んだサソードRに右手のハンマーで攻撃するとサソードRが後進したのを見計らって遠距離対応のモーニングス

ターでサソードRの腹部を力一杯叩く。

「グブツ！」

サソードRの口の辺りから大量の血を吐く。

「ゴホッ！ゴホッ！」

サソードRは、怯み地面に倒れてまだ血を吐く。

「人間とは儂等に比べて弱いんじやのお！」

「く・くこそ！」

サソードRは、サソードヤイバーを構えるが……

「うっ！」

ガラッ！

サソードRは、サソードヤイバーを地面に落としてしゃがみ込む。

（体が言う事を聞かない！？）

「成る程！貴様残響死滅との傷が完治しとらんのじゃろ。」
エコーオフデス

地龍王は、真っ先に見抜かれた。
ヨルムンガンド

「そうと解れば此方のモンじゃ！」

地龍王は、サソードRに向かい走り出しモーニングスターやハンマ
ヨルムンガンド

ーで攻撃しながら無数の鉄球をサソードRに当てた。

「グブワアアアアツツ！ー！」

サソードRは、ヨルムンガンド地龍王のコンビネーション攻撃を喰らい力無く倒れる。

「これで彼も終わりだね！」

「いくら名刀でも使い手が後数年後成長した奴ならヨルムンガンド地龍王と互角に渡り合えたのにな・・・少し残念だ。」

デッドオアライフ フロストジョーカー
生死境界線と冰雪悪魔は、勝負が決まったと予想した。

ヨルムンガンド
地龍王は、倒れたサソードRを確認した。

「さてと……片付けた事じゃし竜戦族ドラグーンの巫女でも連れて帰るかのぉ！」

ヨルムンガンド
地龍王は、サソードRから一步一步と離れて行った。

（連れて行く？……リユオーネを……俺は……体が動かない……感覚も無くなり掛かっている……ごめんリユオーネ……）

「流れを読み！スギードレー！」

（剣先輩？）

サソードR……杉崎は、一瞬だが剣の声が頭の中に響いた。
剣が生きている頃を杉崎は、思い出していた。

「スギードレー！今日は、特別に実戦訓練を見せてやる。この竹刀でな！」

「って！周りワームに囲まれていますよ！成虫じゃなくても危ないですよ！」

「大丈夫だ！オレを信じろ！」

剣は、余裕で言う。

その隙にワームが一気に襲い掛かる。

「うわっ！」

杉崎は、もうダメだっと思い目を瞑った。

シュッ！

剣は、ワーム達の攻撃をかわすとワーム達の視界外の場所に居た。

「たあっ！」

パシーン！

剣は、杉崎に襲おうとしているワームを薙払い助ける。

それを見たワーム達は、剣に標的を変えて襲い掛かる。
シュッ！

剣は、不思議とワーム達の攻撃をかわす。

（えっ？何でだ？）

杉崎は、疑問に成りよく見ると剣の動きが川の流れの様にワーム達の攻撃を回避して隙を見つけてはワームの一、二体に強烈な攻撃を放つ。

数十分後ワーム達は、剣の予想も読めない攻撃に解らず次々と倒した。

「剣先輩？今のは？」

「神代孤月流：流月だ。」

「流月？」

「この技は、川の流れの如く動きを変える技だ。防御と回避は清流の様に、攻撃は激流の様に行う技だもしもお前の前に強敵が現れた時に使う事だな！」

「そんな・・・俺には、そんな事「出来る！お前は、神に代わって剣を振るう者の後輩だ！それにお前の努力は、オレが一番知っている。そして杉崎鍵は、愛する人の為に戦えるとな！」剣先輩・・・」

「

「さて行くか・・・っ！！」

ヨルムンガンド
地龍王は、サソードRから離れようとすると背後に巨大な蠍が見えた。

（これは、この世界の蠍と言う虫！？）

ヨルムンガンド
地龍王は、蠍から強烈な殺気を感じてモーニングスターを放ったが蠍の姿等存在しなかった。

（・・・いない！！当たり前じゃ！こんな場所に蠍と言う虫がいる訳がない！！儂が何の気配で感じて攻撃したんじゃ！？儂が感じた敵を殺す虫の気配は・・・）

ヨルムンガンド
地龍王は、正面をしつかりと確認するとサソードRが立ち上がっている。

サード
（蠍から発する闘気か！？）

「・・・今にも・・・不幸に成りそうな女の子の運命を・・・変える！だから・・・剣を・・・使う。それが神に代わって剣を振るう男に教えられた事だ！」

サソードRは、サソードヤイバーを持ち構える。

（コイツ！？意識は無い！唯思う心が身体を起こして動いているじやと！？そして隙の無い構えに凄まじい闘気！？だったら儂は・・・）

ヨルムンガンド
「手加減はせん！！それがお主に対する儂の最高の礼儀！」
地龍王は、鉄球を数百もの数を出してサソードRに放つ。

「神代孤月流！天月！」

サソードRは、全ての鉄球をクロックアップをしないで素早く壊した。

「何！？（儂の全力で作り上げた鉄球を全て壊したじゃと！？だが、懐に入ったらお終いじゃ！）さらばじゃ！剣の蠍！！」

地龍王^{ヨルムンガンド}は、懐に入ったサソードRにハンマーを振り翳した。

「神代孤月流！流月！」

シュツ！

地龍王^{ヨルムンガンド}は、サソードRを当てたが手応えが全く無い。

「！？」

地龍王^{ヨルムンガンド}は、気付くとサソードRが自分の隙のある後ろに居る事を確認した。

「くっ！」

地龍王^{ヨルムンガンド}は、モーニングスターを振りサソードRが正面に戻りサソードバイバーを構え続けた。

「人間の力が竜戦族^{ドラグーン}の決めた運命を砕いてやる。運命に剣を突き立ててやる！！！」

サソードRは、サソードバイバーに全力の闘気を注ぐ。

「神代孤月流！流月！」

『clock・up』

サソードRは、クロックアップに入る。

「sonic・shift!」

次の攻撃に二人は、全力の一撃をお互いに放つ。

『clock・over』

サソードRと地龍王^{ヨルムンガンド}は、お互いに背中を見せていた。

「うっ!」

サソードRは、地面に膝を着ける。

「み・・・見事じゃ!」

ブシューウウウ!! バタン!

地龍王^{ヨルムンガンド}は、首筋から青い血を流すと倒れた。

「あーあー・・・負けちゃたね地龍王^{ヨルムンガンド}。」

「その様だな・・・さて帰るか。」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、帰ろうとすると生死境界線が何かを地龍王の骸に投げた。

デッドオアライブ
「生死境界線！貴様今何をしたんだ！？」

デッドオアライブ
あまりの生死境界線の行動に驚く氷雪悪魔。

「何って最後の使い道。」

デッドオアライブ
生死境界線は、笑顔で言う。地龍王の骸に異変が起こった。
身体が両腕と両足が無くなりその代わり胴体が長くなり更に巨大化していき大きな蛇に変わった。

「くっ！」

サソードRは、サソードエクステンダーに跨ると走り出す。

「キャストオフ！」

サソードRは、サソードエクステンダーのシフトチェンジのステップをローより下に押した。

『cast・off』

サソードエクステンダーの前のボディフレームが蠍の鋏にテールランプが伸びて蠍の尾に後ろと前のタイヤが縦から横に移動し周りが浮き輪が出て来てホバークラフトに変形して地面を浮いている。

『change・scorpion』

サソードエクステンダーは、上昇すると化け物と化した地龍王ヨルムンガンドの方
に来た。

「クロックアップ!」

『clock・up』

サソードエクステンダーもサソードR同様にクロックアップをする。

【シャアアアアア!】

地龍王ヨルムンガンドもsonic shiftの様な速度に変わる。

地龍王ヨルムンガンドは、素早くサソードエクステンダーを巻き付けるがサソード
エクステンダーも鋏で切る。

サソードRは、サソードエクステンダーの尻尾が後ろに引くと立ち
上がった。

「ライダー Slash!」
ガチャ!

サソードRは、サソードゼクターの尾を再び押す。

『rider・slash』

サソードヤイバーからタオキン粒子とポイズンブラッドが出て来て
サソードエクステンダーの鋏からタオキン粒子が宿る。

「たあっ!」

サソードRかライダースラッシュの衝撃波を放つとサソードエクステンダーの缺からも衝撃波を放った。

【シャアアアアアア………】

『clock・over』

化け物と化した地龍王^{ヨルムンガンド}は、爆発した。

サソードRは、サソードエクステンダーを静かに地上を下降した。

ボタン！

サソードRは、地面に倒れ込むと変身を解除して杉崎に戻った。

「ふう……じゃあ代わりに僕が彼を消すか………」

生死境界線^{デッドオアライフ}は、気絶した杉崎を自分の手から鎌鼬を出て止めを刺そうとする。

「そこまでだ！」

「！」

生死境界線^{デッドオアライフ}は、上空からガタツクRがガタツクエクステンダーに乗って来た。

「此処から先は、オレが相手だ！」

ガタツクは、ガタツクカリバーを抜いて生死境界線^{デッドオアライフ}の前に来る。

「ちっ！予想外な事態か！撤退だ！」

デッドオアライフ
生死境界線は、風と共に消える。

「！」

ガタツクRは、向こうから氷雪悪魔が来た事に気付く。
フロストジョーカー

「お前は？」

ガタツクRは、警戒しながらガタツクカリバーを氷雪悪魔に構える。
フロストジョーカー

シュッ！

氷雪悪魔は、ガタツクRに何かを投げてガタツクRも受け止めた。
フロストジョーカー

「何だ？これは。」

「それは、薬だ。この世界のより直ぐに効く品だ。彼に飲ませろ。
このままじゃ彼が死ぬだろう。」

そう言い残すと氷雪悪魔は、吹雪と共に消えた。
フロストジョーカー

・・・！・・・ン！ケン！

（リュオーネーの音がする？）

真っ暗闇な無の中でリュオーネーの声だけが聞こえる。

「ケン！ケン！」

目を開けるとリュオーネーが心配そうな表情で杉崎を見ている。

「リユオーナー？」

「っ！ケーンー！！」

リユオーナーは、杉崎を抱きしめた。

「お気付きになりましたか杉崎様。」

リユオーナーの右隣には、ジイヤが居て反対側にガタツクの所持者加賀美新も居る。

「ジイヤさん？」

「気分は、どうだ杉崎。」

「加賀美さん。すいません色々心配させちゃって……ってどうして俺ベッドに寝ているんです？」

「お前知らないのか！？謎の敵を倒した後に気絶して倒れたんだぞ。」

杉崎は、加賀美から戦いの後を聞いた。

「しかし、あの薬効くんだな……」

「あの薬？」

「ああ、お前が倒れて助けに来た時謎の男から貰ったんだ。」

「謎の？」

杉崎は、どんな人に助けられたのか知らなかった。

「確か左右の目の色の違う男だったな。」

「左右の目の色が違う男!？」

リュオーネーは、それを聞くと驚く。

「どうしたのリュオーネー？」

杉崎は、何か覚えのあるリュオーネーに質問する。

「えっ? ううん・・・何でもない。」

リュオーネーは、俯いて言うが複雑な顔をしている。

神代邸の杉崎が居る部屋の窓の外から氷雪悪魔がリュオーネーを遠くから見る。

「リュオーネー……」

氷雪悪魔は、優しくリュオーネーを見守ると同時に悲しい表情でもある。

氷雪悪魔は、吹雪と共に消えた。

四話：兄妹（きょうだい）（後書き）

次回：仮面ライダーサソード

「私のせいなの？」

「その娘を渡せ。その娘が生きていれば世界が滅ぶんだ。」

「だったら俺は……それを受け入れてやるうううう！！！」

次回第五話：目覚めるもう一つの剣

設定（前書き）

今回は、特別に仮面ライダーサソードの出て来た道具や武術を説明します。

設定

・サソードエクステンダー：形は、カブトエクステンダーに似てます。

マスクモードのスペック：カブトエクステンダーと同様です。

エクスモード：ホバークラフトの様に成り蠍の形状に変わります。海上の移動可能で飛行能力も備わっている。鋏や尻尾からタオキン粒子を凝縮してライダースラッシュと同じ威力を持ち接近の時は、鋏や尻尾を使い攻撃出来る。更に遠距離から衝撃波を飛ばす事も可能なのでライダースラッシュとのコンビネーション攻撃も抜群。尻尾からは、レーザー光線が出る。

モデルは、KAWASAKIのNinja400Rです。理由は、作者が新しく買う予定のバイクだからです。

最高速度

マスクモード：410km

エクスモード：890KM

全長

マスクモード

2100mm

エクスモード

2700mm

全幅

マスクモード

760mm

エクスマード

900mm

全高

マスクモード

1200mm

エクスマード

700mm

・神代孤月流

幕末の神代家が北海道で活躍した剣術。同時の神代家当主が新政府の命で新政府軍と共に土方を殺す命を貰い土方との死闘の末に編み出した剣術。

特徴は、孤月を描く構えを取る物や相手の動きに対応して変幻自在な戦いを取る剣術。

・スコピオンセイバー

杉崎の夢の中に出て来た謎の剣。サソードヤイバーに似ているが使い方が不明。形は、刃を収める窪みが有りサソードヤイバーよりも少し長い。今後の話で詳細が明かされる。

五話：目覚めるもう一つの剣

「さて夕飯の買い出しに行くとするか。」

天道総司は、夕飯の買い出しに行く為籠を持ち商店街に向かおうとしていた。

突然黒いリムジンが天道の目の前で横切り止まった。

リムジンのドアが開き天道に乘れと言わんばかりな物だった。

天道は、元ZEKUTO本部に連れてかれると元ZEKUTO幹部で加賀美新の父：加賀美陸が座っていた。

「俺に何か様か？」

「黙示録が始まる。」

「黙示録？」

「そつだ。正確に言うならヨハネの黙示録だ。」

加賀美陸は、続けて言う。

「666の清らかな命を神の祭る祠にて捧げる事で7つの頭7つの王冠をかぶり十本の角を持つ奈落の龍が現れる。尾の一振りには、天の星を三分の一も叩き落す力を持って戦士達を苦しめる。そして全てを斬り裂く神に魅入られし戦士が己の剣で龍を殺し奈落に落とす。」

「何が言いたいんだ？」

天道は、加賀美陸の不自然な言葉に疑問になる。

「つまり君の力では、この道のりが越えられない。……と言うよりも変えられない。」

「馬鹿馬鹿しい。俺は、天の道を行く男だ。世界は、俺が中心に回っているんだ。」

「だが時に一時期は、別の者が中心に回るんだよ。」

天道は、加賀美陸の言葉に聞き飽きて帰ろうとした時。

「あのリュオーネーと言う娘さんも666の清らかな命の一つだ。」

「！」

天道は、加賀美陸が言った一言で驚く。

あの杉崎と一緒にいた少女がその生け贄の一人と言う事に。

天道が立ち去ると加賀美陸の後ろからドラグーン竜戦族六將軍の一人ダークネススター暗黒流星が現れた。

「何故私の言葉を信じた？」

「君の言っていた言い伝えと我々の世界に伝わる言い伝えが一致していただけだよ。それに光を支配せし太陽を司る神カブトと全てを斬り裂く神サソードの戦いをみたいのだよ。もしかしたらあの杉崎と言う少年は、天蠍の剣・・・スコーピオンセイバーを操れるかもしれない。」

「まあ良い私は、デッドオアライフ生死境界線の命令で来たただけだ。今度会った時は、この世界を滅ぼしている時だがな。」

ダークネススター暗黒流星は、暗黒の中に消えた。

神代邸の駐車場では、サソードエクステンダーのエンジンをかけて乗る杉崎の姿がある。

「良いかいリユオーネー？」

「うん！大丈夫だよ。」

杉崎が乗っているサソードエクステンダーの後ろにリユオーネーが杉崎同様にヘルメットとグローブとジーンズのズボンを着て乗っていた。

「行つてらっしゃいませ。杉崎様、リユオーネー様。」

ジイヤが駐車場で二人の見送りでした。

「行つて来ますジイヤさん。」

「行つて来ます。」

二人は、ジイヤに挨拶を言つとサソードエクステンダーで何処かに向かう。

杉崎がバイク止めると潮の香りが広がり太陽の光で光り輝く海に来ていた。

「海〜」

リュオーネーは、上機嫌だった。

「そんなに海に来たかったか？」

「うん！」

事の始まりは、今から2日前。

リュオーネーがテレビを見ているとドキュメンタリードラマでイルカの番組を見ていた。

「ケン！ケン！海に行こうよ！」

リュオーネーは、番組が終わると真っ先に杉崎に頼んだ。

（断れそうな感じじゃあ無いな。）

結局了解してしまい今の状況でいる。

「鳥だ〜♪鳥だ〜♪」

リュオーネーは、ウキウキとはしゃぐ。

すると杉崎達の影が動き始めた。

杉崎

「！」

杉崎は、微かな気配を感じる。

リュオーネー
「ケン？」

リュオーネーは、杉崎の異変に気付く。

クルッ！

杉崎が後ろを向くとリュオーネーの影がリュオーネーを捕まえようとしている。

ガシッ！

杉崎は、リュオーネーの腕を握るとサソードエクステンダーに急いで乗る。

杉崎

「リュオーネー！しっかり掴まって！喋ったら舌嚙むから！」

リュオーネー
「うん！！」

リュオーネーも自分の影が襲って来る事に気付いたのか杉崎の言う事を聞く。

ブウウウウー！！！！

杉崎は、サソードエクステンダーのアクセルを一気に開けるとフロントアップをさせながら影から逃げ出す。

しかし、影はサソードエクステンダーに追いつくとリアタイヤを握

りそのまま杉崎達を投げた。

リュオーネー

「キヤアアアアアッツッ!!」

リュオーネーは、そのまま地面に投げ出され様とした時。

杉崎

「リュオーネー!!」

ガシッ!

杉崎は、俊敏にリュオーネーを抱きかかえると自分を盾にして地面に投げ出された。

杉崎

「アアアッツッ!!」

杉崎の背中へは、地面と削り合わさり血を流した。

リュオーネー

「ケン! ケーン!!」

リュオーネーは、懸命に呼ぶがさっきの怪我で杉崎自身が気を失っていた。

????

「これで邪魔者は、何も出来ないな。」

影から暗黒流星が現れた。
ダークネススター

リユオーネー

ダークネススター
「暗黒流星・・・」

ダークネススター
暗黒流星

「巫女よ・・・さあ、選択をするが良い。このまま私と一緒に混沌カオスの元に戻るか？」

「このままこの人間を殺して元に戻るか？さあ？」

ダークネススター
暗黒流星は、自由で自由じゃない選択をリユオーネーに強要させた。

リユオーネー

「わ・・・わかった「いうなりリユオーネー！！」ケン！」

杉崎は、倒れた身体を起き上がる。

杉崎

「俺は、お前等が気に食わない！女の子を道具としか思わないお前等を！だからリユオーネー！！そんな奴らの言う事を聞くな！」

杉崎の言葉を聞いてリユオーネーは、涙を流した。

杉崎

「リユオーネーを・・・連れて行くなら俺を倒せ！」

杉崎は、サソードヤイバーを構える。

『standby!』

「変身！」

『Henshin!』

杉崎は、サソードMに変身した。

ガチャッ！

サソードMは、サソードヤイバーの尾を押した。

サソードM

「キャスト・オフ！」

『cast・off』

『change・scorpion』

サソードMは、サソードRに変形した。

サソードR

「（今は、全力で行かないと俺の身体が倒れる時間の問題だ。）
ク
ロック・アップ！」

『clock・up』

サソードRは、クロックアップに入る。

ダイクネススター
暗黒流星

「面白い！」

暗黒流星は、徐々に身体が班目模様になり両肩からアナコンダが二匹出て来て自身の頭も三本の角を生やした班目模様の龍に変化して下半身は、暗黒の闇に上半身は左右に六本の鋭利状の腕を持つ怪人に変化した。

サソードR

「テリヤアアアツッ!!」

サソードRは、怪人となった暗黒流星に斬りかかる。

スカッ!

サソードR

「何!?!」

サソードRは、サソードヤイバーで何度も斬っても全く手応えが無いどころか余裕の表情を暗黒流星は、している。

暗黒流星

「その程度か?」

シュッ!

暗黒流星は、左肩のアナコンダをサソードRに向かって体当たりした。

サソードR

「グアアアアツッ!」

サソードRは、飛ばされたが宙返りして壁に衝突するのをなんとか

回避した。

『clock・over』

そしてクロックアップも解除した。

ダイクネスター
暗黒流星

「私の別名は、ザッハーク邪悪龍王！他の者とは、違いSONICShiftが出来ない代わりに自身身体を闇と一体化する事が出来る。」

サソードR

「何だって!？」

つまりサソードR自身の攻撃は、全く意味が無い物だった。

ザッハーク
邪悪龍王

「さて、色々私達の同志を殺してくれたな。たつぷりと礼をしてやる!！」

ザッハーク
邪悪龍王は、サソードRに攻撃を開始した。

サソードRも抵抗したが闇と一体化したザッハーク邪悪龍王の前では無力に等しく蹴り続けられる。

リユオーネー

「や・・・やめて・・・」

サソードR

「グワッ!ガアッ!」

リュオーネーは、悲願するが邪悪龍王^{ザッハーク}はやめない。

リュオーネー

「お願いイイイイイイッッッ！！ケンをイジメないでええええッッッ！！」

するとリュオーネーの身体が光出した。

邪悪龍王^{ザッハーク}

「な！何だあつ！？」

サソードR

「リュオーネー・・・？」

傷ついたサソードRは、リュオーネーの方を見た。

天道

「あの光は！？」

カブトエクステンダーに乗った天道が突如トンネルから眩しい程の光が出てる事を確認して止まったがトンネルの中にカブトエクステンダーで向かう。

ピカッ！

ザッハーク
邪悪龍王

「グアアアアッ！」

リュオーネーの放つ光を浴びたザッハーク邪悪龍王は、身体が溶け始めた。

ザッハーク
邪悪龍王

「おのれ！」

ザッハーク邪悪龍王は、この場で自分に分が悪いと判断したのか消えた。

ボタン！

リュオーネーは、さっきの光を出したせいなのか気絶して倒れた。

サソードR

「リュオーネー！・・・！？」

サソードRがリュオーネーの元に駆け寄ろうとするとカブトゼクタイが横で切った。

振り返るとベルトを付けた天道の姿が現れカブトゼクターを片手に持っていた。

サソードR

「天道さん？」

天道

「その娘を渡せ。その娘が生きていれば世界が滅ぶんだ。」

サソードR

「殺すんですね！」

天道

「そうだ。殺さなければ黙示録の预言通りになってしまう。」

サソードR

「他に方法があるんじゃないんですか？」

天道

「無い！その子一人の為に世界を滅ぼさせるワケにはいかない。」

サソードR

「天道さん！アンタにだって世界を敵に回しても守らなければ成らない大切な物だって有るハズだろう！？」

サソードRの言葉を聞いて天道の頭の中には、妹のひよりが脳裏に浮かんだ。

天道

「杉崎・・・そこまで言うなら俺を倒せ！」

そう言うとかブトゼクターをもって構える。

天道

「変身！」

『H E N S H I N』

カブトMは、ベルトに装着されているカブトゼクターの角を動かした。

カブトM

「キャスト・オフ！」

『c a s t ・ o f f』

カブトMは、上半身の鎧が分解して顎に下向きの角が上がってカブトムシの角に変形する。

『c h a n g e ・ b e e t l e』

カブトRに変わるとカブトクナイを構えサソードRもサソードヤイバーを構える。

サソードR

「セリヤアアアアッッ！！」

カブトR

「フンッ！」

パキーン！！

お互いの武器をこすり合わせて火花と金属音が響きあう。

サソードRは、気絶して倒れたリユオーネーを消えて安全な場所に非難する為に片手で抱えてカブトRと戦う。

トンネルを出て安全な場所に着くとリユオーネーを降ろしてカブトRと戦いを本格的に行い始める。

サソードR

「神代孤月流！地月！！」

サソードRは、孤を描くと地面を斬りサソードヤイバーの刃の衝撃波がカブトRを襲う。

カブトR

「くっ！！」

カブトRは、間一髪ギリギリで地月を回避してサソードRの懐にもぐり込む。

そのままカブトクナイで斬りかかるがサソードRもそれを見逃さずにサソードヤイバーでカブトRを斬りかかる。

カブトR / サソードR

「グアアアアッ！！」

双方は、クロスカウンターを食らい数メートルも後ろに飛んだ。

カブトR

「・・・」

カブトRが立ち上がると空からカブトゼクターに似たゼクター：ハイパーゼクターがやって来る。

カブトRは、ハイパーゼクターを横腰に装着した。

カブトR

「ハイパーキャストオフ！」

ガチャッ！

『hyper・cast・off』

カブトRの身体が更に強固な物へと変わっていく。

『change・hyper・beetle』

カブトRは、ハイパーフォームに変化した。

今後はカブトHと略す。

更に空からやって来た剣パーフェクトゼクターが舞い降りた。

するとカブトHの周りに蜂のザビーゼクターやトンボのドレイクゼクターがパーフェクトゼクターに合体した。

それは、サソードゼクターも例外で無く合体した。

サソードゼクターがパーフェクトゼクターの所に強制的に装着して

サソードRは、変身を解除して杉崎になる。

「しまった！」

カチッ！

『s a s o r w d ・ p o w e r』

カブトHは、そのままパーフェクトゼクターのサソードのスイッチを押す。

「ハイパーウェーブ！」

『m a x i m u m ・ h y p e r w a v e』

タオキン粒子の衝撃波が杉崎に目掛けて放たれた。

「ぐあああああ！！」

サソードヤイバーだけを持った杉崎は、カブトHの攻撃に当たり左鎖骨から右の下腹の辺りまで斜めに斬れて血を吹いて倒れる。

「可哀想だが……」

カブトHは、パーフェクトゼクターを地面に刺すと気絶したリュウオ―ネーの所に歩み寄る。

【覚悟は、決まったか？】

倒れた杉崎の頭の中に天蠍の像の音が響く。

「お・・・俺は・・・」

『maximum・rider・power』

カブトHは、ハイパーゼクターを押す。

『OEN・TWO・THREE』

杉崎は、頭を上げるとカブトRがライダーキックをリユオーネーの前で構えていた。

「俺は・・・」

「ハイパー・・・キック！」

「だったら俺は・・・全てを受け入れてやるうううう！！！」

杉崎は、立ち上がり叫ぶ。

【良い覚悟だ。】

天蠍の像に刺さっていたスコピオンセイバーが抜けて消える。

『rider・kick』

カブトHは、そのまま飛び上がりリユオーネーにとどめをさそうとしたその時！

シュッ！ドカアアアン！

「うわっ！」

カブトHは、何かに邪魔されてハイパーキックを失敗してしまう。

「これは！？」

カブトHは、よく見るとサソードヤイバーに似た剣が来て杉崎の所に来て地面に刺さる。

「ん？」

パーフェクトゼクターに強制的に装着していたサソードゼクターがパーフェクトゼクターから離れて杉崎の元に戻る。

「天道さん……俺にだって世界を敵に回しても守らなければならない物が在るんだ……だから俺は、全ての咎を背負う！！」

『standby』

サソードゼクターは、杉崎の右手に乗る。

「変身！」

『Henshin』

『cast・off』

『change・SCORPION』

杉崎は、サソードMを一気にサソードRにさせるとサソードニード

ルを再び上げてスコープオンセイバーを鞘の様に持つ。

左手にスコープオンセイバー、右手にサソードヤイバーを構えるとサソードヤイバーをスコープオンセイバーに装着させた。

「ハイパーキャストオフ！」

ガチャッ！

サソードニードルを押す。

『hyper・cast・off』

サソードRのショルダの蠍の缺の部分に鋭さを増し、右胸辺りに付いていた蠍の胴体も真ん中に来た。更に両足辺りと両腕の辺りが紫のプロテクターを形成し頭部の蠍の尻尾も鋭く成った。

『change・hyper・scorpion』

サソードRは、サソードHに変身した。

「俺は、絶対にリユオーネーを守る為に負けない天道さん！」

サソードHは、スコープオンセイバーに収まったサソードヤイバーを抜きスコープオンセイバーと共に構えて二刀流の状態だった。

「なら掛かって来い。」

カブトHもパーフェクトゼクターを構える。

五話：目覚めるもう一つの剣（後書き）

次回仮面ライダーサソード

「裏切ったな・・・氷雪悪魔！！」
フロストジョーカー

「貴様に我等海龍族が竜戦族に与えられた屈辱と虐げられた嘆きの日々が解るのか？」
ドラグーン

「解った・・・確かにアンタ達の憎しみ受け取った！！」

次回 悲しみと嘆きの過去

六話：悲しみと嘆きの過去

前回から

杉崎は、サソードMを一気にサソードRにさせるとサソードニードルを再び上げてスコピオンセイバーを鞘の様に持つ。

左手にスコピオンセイバー、右手にサソードヤイバーを構えたとサソードヤイバーをスコピオンセイバーに装着させた。

「ハイパーキャストオフ！」

ガチャッ！

サソードニードルを押す。

『hyper・cast・off』

サソードRのショルダーの蠍の鋏の部分に鋭さを増し、右胸辺りに付いていた蠍の胴体も真ん中に来た。更に両足辺りと両腕の辺りが紫のプロテクターを形成し頭部の蠍の尻尾も鋭く成った。

『change・hyper・scorpion』

サソードRは、サソードHに変身した。

「俺は、絶対にリユオーネーを守る為に負けない天道さん！」

サソードHは、スコピオンセイバーに収まったサソードヤイバーを抜きスコピオンセイバーと共に構えて二刀流の状態だった。

「なら掛かって来い。」

カブトHもパーフェクトゼクターを構える。

現在

サソードH

「タアアアツツ!!」

サソードHは、サソードヤイバーでカブトRに斬りかかる。

シュツ!

カブトHは、それを交わしてパーフェクトゼクターで斬りかかる。

ガシーン!

サソードHは、スコピオンセイバーでパーフェクトゼクターの攻撃を防いだ。

カブトH

「杉崎・・・見せてやろう!本物の太陽の力を!」

ガシヤツ!

カブトHは、ハイパーゼクターを押す。

『maximum・rider・power』

サソードH

「なら、俺も己の剣で立ち向かうまでだ!」

『rising・rider・power』

サソードHは、サソードヤイバーにスコープオンセイバーを填めてスコープオンセイバーの蠍の尻尾を押した。

『OEN・TWO・THREE』

カブトHは、カブトゼクターの角を引いて押す。

カブトH

「ハイパー・・・キック!」

『rider・kick』

サソードH

「ハイパースラッシュ!」

スコープオンセイバーの尻尾を押す。

『rider・slash』

スコープオンセイバーの刃からタオキン粒子が集まり数メートルの長く巨大な刃と化した。

カブトHの右足にもタオキン粒子が集まり高くジャンプしてサソ

ドHに飛び掛る。

サソードHもタオキン粒子の刃を自分の方に来るカブトHに斬りかかる。

サソードH／カブトH
「タアアアッ！」

二人の技が互いにぶつかる。

だが！

お互いに動かない。

いや……動けないでいる。

カブトHは、そのまま空中で動けなくサソードHも一ミリも動かせない。

そして

ドカアアアアン！！

サソードH／カブトH
「グアアアッ！！」

互いに吹っ飛んだ。

カブトH
「う……ん！？」

カブトHは、起き上がるとサソードHとリュオーネーの姿がいなくなっていた。

カブトH

「逃げたか。」

カブトHは、変身を解いて天道に戻った。

『hyper・clock・over』

先程までカブトHと戦っていたサソードHは、お互いの必殺技で飛ばされた隙にリュオーネーを連れてハイパークロックアップをして街の中に移動した。

サソードH

「ふう……あれ？」

サソードHの目に映る景色がボヤけて来た。

ボタン！

サソードHは、そのまま変身が解けて杉崎に戻った。

そして気絶したリュオーネーと共に杉崎も気絶した。

加賀美

「今日も異常なし！」

警官姿の加賀美が街の中をパトロールしていた。

加賀美

「ん？」

交番と建物の間の小道に人の気配を感じた加賀美は、覗くと。

加賀美

「杉崎！？それにこの娘？」

加賀美は、全身ボロボロの杉崎と気絶しているリュオーネーを見て驚いた。

加賀美

「どう言う事だ！？ってそんな事より治療を！」

加賀美は、勤務を早めに終わらせると倒せている二人を何処かに連れて行く。

加賀美

「って言っても、何処に行けば・・・おい加賀美どうしたんだ？」

加賀美は、振り向くとそこには一人の少女がスケッチブックを持って立っていた。

加賀美

「ひより・・・」

彼女の名前は草加部ひよりである。

ひより

「そんな事より何で杉崎が大怪我して気絶しているんだ？それにその子？そのままにしておけないな。来い加賀美。」

杉崎とリュオーネーを背負った加賀美は、ひよりに連れてかれてとある洋食屋に来た。

Bistro la Salle かつて加賀美がZECT時代にア

アルバイトをしていた洋食屋である。

「いらつしゃい！」

ドアを開けると女店主竹宮 弓子がやって来た。

弓子

「加賀美？久しぶりだね・・・ってどうしたのその子達！？」

弓子は、驚きを隠せなかった。

加賀美

「事情は、後で話します。それより二階を使って良いですか弓子さん？」

弓子

「ええ！良いわよ！」

弓子は、そのまま二人を背負った加賀美を二階まで案内した。

弓子

「ひより？どうしたの？あの二人？」

弓子もいきなりの事で解らなくひよりに聞いた。

ひより

「僕もよくは解らないけど後で加賀美に聞くしたないよ。」

弓子

「そうね。それしか無いわね。」

二人は、加賀美が来るのを待つ事にした。

「はっ！はっ！はっ！はっ！」

暗闇で暗黒流星は、リュオーネーの放った光のダメージが未だに癒されずに苦痛を耐えている。

「くっそっ！あの小娘！甘く見ていたがまさか油断してしまう位の攻撃を放つとは……」

暗黒流星の目の前に氷雪悪魔が現れる。

「……お前か……混沌君主からのお呼びか？」

暗黒流星は、顔を上げると目の前から青く鋭い手が襲いかかる。

「くっ！」

暗黒流星は、瞬時に避けた。

「何をする！？」

咄嗟に避けたがやはり苦しい表情だ。

「悪いが貴様には、死んでもらう！」

フロストジョーカー
氷雪悪魔の手から水が集まりそのまま暗黒流星の方に狙いを定めて攻撃をする。

「ぐあああああ！！！」

ダークネススター
暗黒流星の今の状態は、まともに戦えない。その為体が水に貫かれた。

「終わりだ！！・・・！！？」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、そのまま水圧を上げた水で暗黒流星を攻撃すると風が現れる。

「！？風だと！！」

フロストジョーカー
氷雪悪魔の水の攻撃は、風の防壁で塞がれ暗黒流星は無事だった。

「まさか君が我々を裏切るとはね氷雪悪魔いや・・・敗北国海龍族皇子リヴァイアサン24世。」

ダークネススター
暗黒流星の後ろから生死境界線が笑顔で現れた。

「裏切ったな・・・フロストジョーカー氷雪悪魔」

ダークネススター暗黒流星は、手を闇に変えてフロストジョーカー氷雪悪魔に攻撃する。

クザッ！

「おのれ！」

フロストジョーカー氷雪悪魔は、多勢に無勢と判断して逃げた。

「追うかな？はい！ダークネススター暗黒流星！」

デッドオアライブ生死境界線は、小瓶に詰めてある飲み物をダークネススター暗黒流星に渡して飲むと身体デッドオアライブの傷が見る見る内に治っていった。

「すまない・・・さつて、排除するか！フロストジョーカー氷雪悪魔を！」

「そうそう、裏切り者には、死を持って償わないとね。」

デッドオアライブ生死境界線の目から殺気が今にも行動しようと言つダークネススター暗黒流星と共にフロストジョーカー氷雪悪魔を追う。

B i s t r o l a S a l l e の二階では、加賀美が二人をベッ

トに寝かせ看病をしていた。

（不味いな・・・このままじゃ杉崎の命に関わる！けど・・・何か事情がアルっぽいし・・・ん？）

加賀美は、ポケットから異物感を感じた。

取り出すとそれは、ヨルムンガント地竜王の戦いでフロストジョーカー冰雪悪魔から貰った小瓶だった。

まだ小瓶に薬が残っている。

（よっし！一か八かやるしかないな。）

加賀美は、小瓶を開けるとそのまま杉崎に飲ませた。

すると傷だらけの杉崎の身体は、治っていった。

「・・・此処は？」

杉崎が目を覚ますと加賀美が写った。

「気が付いたか？」

「加賀美さん？」

「此処は、Bistro la Salleって言うレストランだ。このオーナーとは、アルバイトしていたから少しばかり部屋を借りていたんだ。」

「リユオーネーは？」

杉崎が聞くと加賀美が寝ているリユオーナーを指差した。

「よかった・・・」

「それよりどうしてこんな事になったんだ？」

杉崎は、加賀美にこれまでの流れを説明した。

「天道が・・・この子を？黙示録の鍵であるリユオーナーを殺せば黙示録が無くなるか・・・安心しろ・・・俺は、俺だ。天道じゃないが・・・俺はお前達の味方だ。じゃあ俺は、何とか穏便に別の事でお前達が大怪我した事を考えないとな・・・」

そういつて加賀美は、部屋を出て行った。

「ありがとうございます加賀美さん。」

「くっ・・・」

フロストジョーカー
氷雪悪魔は、町の裏側で痛みを抑えていた。

「見つけたよ氷雪悪魔。」
フロストジョーカー

生死境界線と暗黒流星が直ぐに来た。
デッドオアライフ ダークネスター

「もう追いかっこは、終わりがい？」

「そんな事より逆賊を排除するぞ。生死境界線。」
デッドオアライフ

「はいはい。」

すると生死境界線の身体は、緑色に変化して髪も長く一本一本が蛇の様になり下半身が大蛇その物に変身した。
デッドオアライフ

「抜け駆けするな生死境界線いや嵐龍王。」
デッドオアライフ テュボーン

暗黒流星も邪悪龍王に変身した。
ダークネスター ザッハーク

「私もそう簡単にやられるほど甘くはない！」

氷雪悪魔は、身体が青く変色して魚の様なヒレが現れて海龍の姿に変身した。
フロストジョーカー

「さあ、殺し合いの時間だよ海龍王。」
リヴァイアサン

「本当に色々迷惑をかけてすみませんでした。」

杉崎は、ひより達に頭を下げて謝罪した。

「ありがとうございます・・・」

リユオーナーも杉崎に続いて頭を下げた。

「いいよ。それより杉崎、この子を守ってあげなよ。」

ひよりは、杉崎に優しく言う。

「ひよりさん・・・」

「一人で抱え込むなよ。困った時は、俺達に相談しろよ。絶対にお前達の味方だからな。」

加賀美は、杉崎とリユオーナーの肩を優しく叩いた。

「加賀美さん。」

杉崎とリユオーナーは、加賀美達の言葉を聞いて内心ホッとした。

「・・・」

その光景を裏で天道が杉崎とリユオーナーを見守る。

グラアアアアアア！！！！！

「！？」

「なっ！なんだ！？」

床が揺れ地震様な物だった。

「まさか！？」

杉崎は、急いでお店から出て行った。

「杉崎！？」

加賀美は、杉崎を追うが！

「加賀美さん！俺がいない間リユオーネーを守ってあげて下さい！俺やらなければならぬ事があるんで！」

「あの竜戦族^{ドラグーン}つて奴と戦うのか！？死ぬなよ！お前には待っている人達がいるんだからな！」

「はい！」

杉崎は、何処からかサソードエクステンダーを呼び出して揺れが一番激しい場所に向かった。

「はああー!!」

リヴァイアサン
海龍王は、地面が揺れて其所から水を呼び出すと嵐龍王デューボンと邪惡龍王ザッハークに向かつて攻撃した。

「はっ!」

ザッハーク
邪惡龍王は、闇の球体を創り出すと球体が水を吸い込んだ。

リヴァイアサン
「どうしたの?もつと遊んでよ海龍王!」

デューボン
嵐龍王は、蛇に変化した髪を海龍王リヴァイアサンに飛ばした。

「がああああー!!」

リヴァイアサン
海龍王は、二人に圧されている。

「此処か!」

杉崎は、サソードエクステンダーから降りると競技場に辿り着いた。
直ぐに競技場内に入ると……

「何だ?仲間割れか?」

杉崎は、その光景が信じ難いものだった。

「終わりだよ海龍王！！」
リウアイアサン

「喰らうが良い！！」

リウアイアサン 海龍王は、テュボーン 嵐龍王の風の矢とバツサーク 邪龍王の闇の矢を受けて身体の至る所から血吹雪を出して倒れフロストジョーカー 氷雪悪魔に戻る。

「おい！」

杉崎は、倒れたフロストジョーカー 氷雪悪魔の元に駆け寄る。

「貴様に我等海龍族がドラグーン 竜戦族に与えられた屈辱と虐げられた嘆きの日々が解るのか？」

フロストジョーカー 氷雪悪魔は、悔し涙を流しながら杉崎に言う。

「どう言う事だ？」

「今から話す事をしかと聞け……」

かつてとある次元の世界に海の国と呼ばれる国が存在した。

国は、豊かで民も善良な者達が多く暮らし治める王も代々人格者が多く出ている位の国だった。

しかし、そんな平和も永くは続かなかった。

隣国の大国の王は、部下でもある將軍に殺されその將軍が王になった。

そう下克上そのものであり近隣の国々は、將軍・・・混沌君主の支柱に納められた。

海の国も必死で抵抗を続けたが、混沌君主の仕える5人の將軍によつて半日で国は、陥落した。

それからが地獄の幕開けだった。

男は、皇子以外の全て殺された。

子供老人も例外なく。

そして女は、混沌君主の次なる野望の為にエネルギー資源として女性や少女達を連行されていきそれ以外は殺された。

皇子は、混沌君主の將軍としてあらゆる無理難題の試練乗り越えて何とか今まで我慢を耐えてきた。

だが、今度は妹のリュオーネーをエネルギー資源として混沌君主が要求してきた。

皇子は、我慢出来ずに自ら妹を逃がす事に成功した。

そして皇子は、自らの名を捨てて氷雪悪魔フロストジョーカーと言う様になった。

「じゃあアンタがリユオーネーの兄貴なのか？」

「そうだ・・・今更我が種族海龍族には、未来など無い。だが！この世界を我々の様な者を出してはいけない・・・必ず・・・必ず・・・」

杉崎は、氷雪悪魔フロストジョーカーいや・・・リヴァイアサン24世の手を握った。

「解った・・・確かにアンタ達の憎しみ受け取った！！」

杉崎がそう答えた瞬間にリヴァイアサン24世の顔が微笑み出した。

「頼んだぞ・・・蠍の剣士・・・」

リヴァイアサン24世は、杉崎の腕の中で静かに息を引き取る。

「あーあー・・・死んじゃった。つまんないな・・・カスが居なくなつて・・・」

ピクッ！！

杉崎は、嵐龍王テュポーンの残酷な言葉に目の色を変えて瞳孔が開いた。

「・・・おい！今カスって誰の事を言っているんだ？」

杉崎の後ろから紫の巨大な蠍が現れた。

「「!!!?」」

二人の龍王は、杉崎のオーラが創り出した紫の巨大な蠍を見て背筋が凍る殺気に襲われた。

「貴様らに教えてやろう・・・俺は、杉崎鍵・・・貴様らの様な馬鹿を倒す男。そして神に代わって剣を振るう者だ!」

『standby』

サソードゼクターは、杉崎の右手に乗る。

「変身!」

『Henshin』

『cast・off』

『change・scorpion』

杉崎は、サソードMを一気にサソードRにさせるとサソードニードルを再び上げるとスコピオンセイバーが空から現れて鞘の様に持つ。

左手にスコピオンセイバー、右手にサソードヤイバーを構えたとサソードヤイバーをスコピオンセイバーに装着させた。

「ハイパーキャストオフ!」

ガチャッ！

サソードニードルを押す。

『hyper・cast・off』

サソードRのショルダーの蠍の缺の部分に鋭さを増し、右胸辺りに付いていた蠍の胴体も真ん中に来た。更に両足辺りと両腕の辺りが紫のプロテクターを形成し頭部の蠍の尻尾も鋭く成った。

『change・hyper・scorpion』

サソードRは、サソードHに変身した。

「二人掛かりで来い！だが！俺は死なない！俺の帰りを待っている人達が居るからな！」

そう言つと邪悪龍王^{ザッハーク}が正面に嵐龍王^{テュポーン}が真後ろに来た。

「人間風情が！」

「馬鹿にするな！」

後ろから鎌鼬の嵐と正面から全てを圧迫する暗闇が現れた。

「神代孤月流・・・二刀武伝！」

サソードHが二刀を構えるとそのまま攻撃を受けた。

「うおおおおお！！！」

「たああああ！！！」

二人の龍王は、まだ攻撃を止めない。いや止められない。ここで止めれば確実に死ぬからだった。

「何処を見ている？」

「！？」

^{ザッハーク}邪惡龍王の背後にサソードHが何時の間にか居た。

「光滅斬！！」

サソードHは、剣舞の様に^{ザッハーク}邪惡龍王に攻撃した。

「ふはっはっはっはっはっ！！！！馬鹿目！私は、闇の形など無いと同じなのだぞ！！！」

^{ザッハーク}邪惡龍王は、笑った。

サソードHがサソードヤイバーをスコピオンセイバーに収めた瞬間！

^{ザッハーク}邪惡龍王の身体が光の線が一本描かれて真っ二つに割れた。

「な・・・何故？」

^{ザッハーク}攻撃された邪惡龍王は、どう言う事なのか解らない。

「神代孤月流二刀武伝・光滅斬は、斬れない物を斬る技だからだ。光は、闇を照らし時にはその闇すらも切り裂く事の出来る物。それが光滅斬だ。」

サソードHが説明した。

「そ！そんなあああああ！！！！！」

邪悪龍王^{ザッハーク}は、そのまま爆発した。

すると嵐龍王^{テュポーン}の姿が居なくなっていた。

サソードHは、変身を解いて杉崎に戻った。

骸のリヴァイアサン24世の身体に近付くと彼の身体は、灰の様に消えていき首飾りだけが残った。

「ケン！」

帰るとリュオーネーが迎えてくれた。

「・・・・・・・・」

杉崎は、覚悟を決めたのかリヴァイアサン24世の首飾りをリュオーネーに渡した。

「！？ケン？これって！？」

リュオーネーもその首飾りが自分のと一緒である物だと知り動揺した。

「すまない・・・お兄さんは・・・立派だった？兄さんは立派だった？」

リュオーネーの目から涙が流れていた。

「ああ！立派でお前の事を最後まで気にしていたぞ・・・」

「そう・・・ありがとうケン・・・」

リュオーネーは、そのまま杉崎の胸で泣き続けた。

「そうか……竜戦族六將軍は、一名を裏切り者を除いて二人だけになったか……」

水晶で見ていた混沌君主は、次なる事を考えていた。

六話：悲しみと嘆きの過去（後書き）

次回 仮面ライダーサソード

「ケンー!!」

「リュオーネー!!」

「久しぶりだな？ウヌに会うのは。」

「エコーオブデス
残響死滅!!」

七話：修羅

七話：修羅

カオスロード
混沌君主は、玉座のまで六芒星のエンブレムを見ていた。

そこには4つの黒く光る点と2つの赤く光る点が存在した。

「まさかな・・・氷雪悪魔が最初から裏切り者だったとは言えさらに暗黒流星までもやられて漆黒の四角形になるとは不吉な。」
フロストジョーカー
ダークネススター

カオスロード
混沌君主は、腕を組んで考えた。

そして目を勢い良く開けると！

「ならば！私も行くか！」

カオスロード
混沌君主は、立ち上がった。

カオスロード
「混沌君主。我也行かせて下さい。」

カオスロード
混沌君主の後ろには、
エコーオブデス
残響死滅がいた。

エコーオブデス
「残響死滅・・・まあ良い。今まで修行していた分を私の為に手伝え。」

「御意！」

エコーオブデス
残響死滅は、今この思いだけしか無かった。

（必ずサソードを我の手で！）

「リュオーネー？」

杉崎は、リュオーネーの部屋に入ると沢山の何かを縫ったのに失敗した後が山の様に積んであった。

「ケン？ごめんね。私少しやる事があるから。」

リュオーネーは、今作っているものを杉崎に見せたくないらしい。

「そ、そうか？」

杉崎は、何かを察したのか部屋から出て行った。

「ジイヤさん。」

「はい？」

「リュオーネーは、何を？」

「それは、乙女心と言うものですよ。杉崎様。今はそつとして置きましょう。」

ジイヤは、笑顔で言う。

事の始まりは、今から4日前に遡る。

「え？杉崎様にお礼ですか？」

「うん！私ケンに守ってもらってばかりだからお礼がしたいの。」

リュオーネーの真剣な眼差しにジイヤは、真剣に考え込む。

「でしたら、帽子なんてどうでしょうか？」

「帽子？どんなのが良いかな？」

「そつでございますね・・・！」

ジイヤは、ふつとある事を思い出した。

それは、剣が生きていた頃の話だった。

「ジイヤ。スギドーレは、どの帽子が似合うかな？」

「そつでございますね・・・杉崎様ならカーボーイハットなんか良いのでは？」

「そうか！ならカーボーイハットをやらないとな。特別良いのを。」

それから数週間後剣は、スコピオンワームになりサソードに変身したばかりの杉崎に倒された。

「カーボーイハットなんか良いのでは？」

「カーボーイハット？」

リュオーネーは、頭を傾げて言うとジイヤが帽子の雑誌を見せて説明した。

「わかった。じゃあ私がそれを作る。」

「リュ、リュオーネー様！？カーボーイハットは、難しいですよ？」

ジイヤは、心配した。

「良いの私が出来るとしたらこんな事だから。」

リュオーネーは、笑顔で言うつと早速材料を貰いカーボーイハットを作り始めた。

しかし、やはり経験にない事をやるのは至難の業だった。

それでもリュオーネーは、諦めない。

「頑張らないと！」

そして一週間後。

「リユオーネー？どうしたんだ？いきなり外に出ようなんて。」

「良いの、良いの。たまにはケンと散歩したいし。」

リユオーネーは、白い紙に包んだ物を大事に持って杉崎と外に出る。その後ろから黒いサングラスを付けた2人組の男が杉崎達の後ろを尾行した。

「何で私までこんな事をしなくてはいけないのですか？」

サングラスをかけた風間大介は、加賀美新たに聞く。

「しょうがないだろう。ジイさんから頼まれたんだから。」

「だからって偶然通りかかった私じゃなくても・・・」

大介は、テンションが下がった。

「おっ！二人が公園に入るぞ。」

加賀美と大介は、二人の後を追いかける。

「ん？」

杉崎は、公園に入ると何故か後ろから妙な気配を感じて振り向くと

誰も居ない。

「ケンどうしたの？」

「ん？何でもないよりユオーネー。（気のせいかな？）」

杉崎は、警戒を解いて公園の奥に進む。

「「あ・・・危なかった・・・」」

草叢から出て来たのは加賀美と大介だった。

「まさか杉崎があんなに勘が良いなんて。」

「危うく見つかる所ですよ。」

二人は、冷や汗を流しながら言う。

別のルートからは、サソードゼクターやガダックゼクター、ドレイクゼクターが杉崎達を見守ると同時に応援のエールを送っていた。

二人は、そんなこんなで杉崎達に気付かれる事なく公園の奥の噴水のベンチの近くまで来ていた。

「ケ、ケン？此处に座る？」

「ああ、座ろうか。」

二人は、ベンチに腰をかけた。

「・・・・・・・・・・」

二人は、数分も何も話さない・・・いや話すネタが思いつかない。

「な・・・なあリュオーネー？」

杉崎が最初に喋った。

「何ケン？」

リュオーネーも喋った。

「出会ってもう一ヶ月になるよな？」

「うん。何故私何かを助けてくてたの？」

リュオーネーは、不思議そうに杉崎を見つめた。

「助けるのに理由なんかいらない。ただ、助けたい。それだけで十分だ。」

「じゃ！じゃあケン。はい！これ！」

リュオーネーが紙袋を渡した。

「リュオーネー？」

「開けて見て。」

杉崎は、言われるがままに紙袋を開けた。

「これって？」

開けると茶色のカーボウイハットが入っていた。

「わ！私もお礼をしたいのに理由なんかいらない。だから単にありがとって伝えたいから私手作りで作ったんだよ。ありがとケン。」

「リュオーネー？」

杉崎は、そのままカーボウイハットを被った。

「ありがと！大事に使っよう。」

二人は、互いに微笑み合った。

それを空から誰かが見ていた。

「人形が感情を持つとは・・・愚かな！」

ビリリリリ！！！！

手を見下ろしている二人に向けて漆黒の稲妻が降り注ぐ。

「ん！？」

加賀美は、空の上がおかしい事に気付く。

「杉崎！リュオーネー！逃げろおお！！！」

「何!?!」

杉崎は、加賀美の声が聞こえると同時にベンチから回避した。

「二人とも!早く逃げるんだ!」

大介も叫ぶと杉崎とリュオーネーの間に見えない壁が現れてリュオーネーは逃げられない。

「ケーン!?!」

「リュオーネー!?!」

杉崎は、リュオーネーの元に駆け寄るがリュオーネーを見えない壁が邪魔して触れられない。

ビリリリ!!

「!?!」

杉崎は、瞬時に避ける。

「久しぶりだな?ウヌに会うのは。」

エコーオブデス
「残響死滅!!」

「こうしてウヌと会ったのもこの場所だったな。」

エコーオブデス
「フツと残響死滅は、笑ながら思い出す。」

「そうかよ！俺は、ちつとも笑えない。て言うか！思い出したくねえし！不愉快そのものだからな！」

杉崎は、辟易した様に残響死滅を軽蔑の眼差しで見た。
エコーオブデス

「さあ始めよう！」

残響死滅（エコーオブデスは、やる気満々だが！

直ぐに杉崎は、エコーオブデス残響死滅から通り過ぎ見えない壁に幽閉されているリユオーネーを助けに入るが！

ビリビリ！

「グアアアアアツツ！！」

見えない壁が杉崎に電撃で跳ね返した。

???

「巫女は、確かに貰った。エコーオブデス残響死滅後はお前が奴をサソードを相手しろ！」

「御意！」

エコーオブデス残響死滅に命令している男ころ竜戦族の王：ドラグーン混沌君主である。
カオスロード

「貴様が！混沌君主だな？」
カオスロード

「いかにも私は、カオスロード混沌君主だ。下等な種族よ。」

カキーン！

杉崎は、サソードヤイバーを使いながら天月を混沌君主カオスロードに放ったがギリギリで防いだ。

「貴様に良い様に利用されて殺された海龍族の者達の恨み此处で晴らしてやる！」

杉崎の目に殺気そのものが宿っていた。

「だから何だ？我が覇道を制覇する為の礎になったのだぞ。光栄だと思わないのか？」

「ふざけなあああッツ！！！」

サソードヤイバーを力強く振る。

「何処を見ているウヌの相手は、我だぞ？混沌君主カオスロード此処は、我が。」

「わかった。」

混沌君主カオスロードは、リュオーネーを連れて次元の彼方にきえた。

「杉崎！！！」

加賀美と大介がやって来ると。

「君らの相手は、僕だよ。」

デットオアライブ
生死境界線が現れた。

加賀美は、ベルトを巻き大介も青と黒を強調したドレイクグリップを手にした。

そしてクワガタのロボット：ガダックゼクターとトンボのロボット：ドレイクゼクターが現れた。

ガダックゼクターは、加賀美の片手に止まりドレイクゼクターもドレイクグリップと合体して銃の形になる。

「「変身！」」

『H E N S H I N』

電子音と共に大介と加賀美は、ドレイクMとガダックMに変身した。

デットオアライブ デュボーン
生死境界線も嵐龍王に変身した。

「さあ始めようサソード！」

エコーオブデス ヴァリトラ
残響死滅は、雷龍王に変身した。

『S T A N D B Y』

サソードゼクターがやって来て杉崎の片手に止まる。

「変身！」

カシャッ！

『H E N S H I N』

サソードゼクターをサソードヤイバーに嵌めた。

杉崎は、仮面ライダーサソードMに変身した。

「キャストオフ！」

サソードMは、サソードの尾を押した。

『c a s t ・ o f f』

『c h a n g e ・ s c o r p i o n』

サソードMは、サソードRに変形した。

「テリアアアアアッツ！！」

サソードRは、^{ヴァリトラ}雷龍王に斬りかかる。

しかし^{ヴァリトラ}雷龍王には、当たらない・・・いや攻撃が読まれていた。

それは、一瞬だった。

「ウヌには、認識すら出来まい。我の能力が何であるか！」

「！」

何時の間にかサソードRの目の前には、死体の山が現れた。

しかし、驚いたのはその光景では無く認識出来なかった。

「くっ！どうやって！？」

すると雷龍王^{ヴァリトラ}は、何時の間にかサソードRの真後ろにいた。

「幻・・・否！時の制御・・・否！空間の超絶・・・否！」

サソードRは、この新しい雷龍王^{ヴァリトラ}の能力に驚き戸惑う。

「ウヌが矮小な雑種が我が能力を目にした事。行幸と思え。」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、雷の輪をサソードRが逃げられない範囲の特大の雷を作った。

「雷の裁き（ヴァジュラ）！！」

ビリリリリイイイツッ！！

「グアアアアアッッ！！」

サソードRは、雷龍王^{ヴァリトラ}の攻撃を当たり焦げた匂いと未だに電気が残っていた。

「杉崎！！」

すでにマスクドフォームになったドレイクRとガダックRは、サソードRを呼ぶ。

「ほら！余所見している位心配じゃないでしょうが！」

嵐龍王^{デュボン}は、風の攻撃でガダックRとドレイクRの前に立ち塞がる。

「くっ・・・」

サソードRは、何とか立ち上がる。

「どうした？その程度か？それでは巫女は、救えぬぞ？」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、サソードRを挑発した。

「まだまだ！」

サソードRが立ち上がり雷龍王^{ヴァリトラ}に斬りかかる。

「そうだ！そうだ！それで良い！戦いに身を置いてこそ我の生きるみちだ！あっはっはっはっ！！」

雷龍王^{ヴァリトラ}は、まさに修羅の様に戦いを楽しみかたまりだった。

雷龍王^{ヴァリトラ}は、雷の槍を作りサソードRの攻撃を防ぎ攻める事を繰り返す。

サソードRもサソードヤイバーで同様な事をしていた。

ピカッ！

すると空から何かがサソードRと雷龍王^{ヴァリトラ}の間に落ちて来た。

「何だ？この剣は？」

ヴァリトラ
雷龍王は、突然空から落ちて来たスコピオンセイバーに触ろうとした。

「うわああああッッ！！」

ヴァリトラ
雷龍王は、スコピオンセイバーの放つ衝撃波に飛ばされた。

直ぐにサソードRは、スコピオンセイバーを握ると抜いた。

左手にスコピオンセイバー、右手にサソードヤイバーを構えるとサソードヤイバーをスコピオンセイバーに装着させた。

「ハイパーキャストオフ！」

ガチャッ！

サソードニードルを押す。

『hyper・cast・off』

サソードRのショルダーの蠍の缺の部分に鋭さを増し、右胸辺りに付いていた蠍の胴体も真ん中に来た。更に両足辺りと両腕の辺りが紫のプロテクターを形成し頭部の蠍の尻尾も鋭く成った。

『change・hyper・scorpion』

サソードRは、サソードHに変身した。

「そうか・・・くくく！それがウヌの全力が良からう！我も全力で行くぞ！ハアアアアアアッ！！」

ヴァリトラ
雷龍王の身体から電気が流れて鋭く頑丈に作り変えた。

「これが我が修行した成果で身に付けた魔霊態だ！」

ヴァリトラ
雷龍王魔霊態は、槍を握ると槍も鋭くなる。

「神代孤月流・・・花月！」

サソードHは、ヴァリトラ 雷龍王魔霊態に花を描く様に斬りつける。

「遅い！」

ヴァリトラ
雷龍王魔霊態は、槍で全て払う。

「隙だらけだ！」

ヴァリトラ
雷龍王は、槍をサソードHの心臓目掛けて突いた。

「神代孤月流！壁月ウ！」

サソードHは、スコピオンセイバーとサソードヤイバーを分離させると絶対防壁の剣舞で槍を防ぐ。

「これで最後だサソード！！」

ヴァリトラ

雷龍王魔霊態は、槍に全ての電気を帯させる。

「なら俺もその槍ごと斬り裂くだけだ！」

『rising・rider・power』

サソードHは、サソードヤイバーにスコピオンセイバーを填めてスコピオンセイバーの蠍の尻尾を押した。

「神雷の魔槍^{ジュビター}！！」

「ハイパースラッシュ！」

スコピオンセイバーの尻尾を押す。

『rider・slash』

スコピオンセイバーの刃からタオキン粒子が集まり数メートルの長く巨大な刃と化した。

「タアアアアアッ！！」

互いに己の技を放った。

ピカッ！

ヴァリトラ

光が辺りを照らしサソードHと雷龍王魔霊態の身体を包み込む。

ヴァリトラ

そして光の全てが消えると動かないサソードHと雷龍王魔霊態が立っていた。

「ぐっ！」

ヴァリトラ
雷龍王魔靈態は、先に倒れた。

サソードHは、人間態に戻った残響死滅エコーオブデスの所にゆっくり歩み寄る。

「こ！殺せ・・・」

エコーオブデス
残響死滅は、覚悟を決めていた。

が！

サソードHは、剣を収めた。

「何故だ！？な！情けのつもりか！？」

エコーオブデス
残響死滅は、勝手な事を言うが次の瞬間。

サソードHが向ける気配を感じた。

（な！何だ？こ・・・この視線は？まるで怒りでも無い悲しみでも無い。この哀れと思う眼差しは？）

「お前は可哀想な奴だな残響死滅エコーオブデス。」

「な！」

エコーオブデス
残響死滅は、言い返せない。

エコーオブデス
そう残響死滅は、始めて恐怖を覚えた。

哀れな眼差しで見るサソード・・・いや杉崎鍵に。

向こうでサソードHの戦いが終わった隣では、テュポーン嵐龍王とガダックRとドレイクRが戦っている。

「こんな所で俺たちを戦っていないで仲間の手当をしろ。」

サソードHが割り込んで来た。

「こんな戦いは無意味だ。」

サソードHは、ドレイクRとガダックRを止めた。

「そうか・・・やられてたんだ。エコーオブデス残響死滅は。なら消えろ！ドラグーン竜戦族に敗者は要らない！！」

エコーオブデス嵐龍王は、力の無い残響死滅に駆け寄り爪で切り裂こうとした瞬間。

『r i d e r ・ s l a s h 』

『r i d e r ・ c u t t i n g 』

『r i d e r ・ s h o o t t i n g 』

テュポーン嵐龍王の身体を三人のライダーの技が瞬時に炸裂した。

「そー！そんなああああああっ！！」

テュボーン
嵐龍王は、爆発した。

「どうするんです彼は？」

ドレイクRは、エコーオブデス残響死滅をどうするのかサソードHに聞く。

「エコーオブデス残響死滅お前らの城は何処だ。」

「まあ良いだろう。どうせ我はもう殺される身だ。我々の城は、次元の狭間だ。これを持って行け。」

エコーオブデス残響死滅は、サソードHにある物を渡した。

「これは？」

「それは我々の城の位置を指す道具だ。我が持っていてても役に立たん。」

エコーオブデス残響死滅は、嘘偽りの無い目で言う。

「解った！行くぞ！」

サソードHは、変身を解除してサソードエクステンダーに乗り城の場所を探す為に走り出す。

「待てよ杉崎！」

ガダックRも変身を解除してガダックエクステンダーで追う。

「やらやれ仕方ありませんね。風は誰にでも吹く。」

大介もマシンゼクトロンに乗る。

こうして黙示録の戦いが始まろうとしていた。

七話：修羅（後書き）

次回 仮面ライダーサソード

「よくぞ来た下等な種族よ！」

「まさかアレはリユオーネー！？」

「俺はどうすればいいんだああ！？」

八話：黙示録開始

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4433m/>

仮面ライダーサソード

2011年12月5日22時54分発行